



八犬傳九輯上帙拙評





旬殿を
多しを
しん知々

八犬傳九輯上帙

同卷九十二面より第二卷九十五面まで前輯八十八面
よりのつぎまで同を八面卷を四巻餘二大復讐の大
場ありてふと事ハつらう二旦夜の間の事ハ長く旬
殿美と記下編五冊一日一夜の事ハ奇編とありて是を
又彼よりと事ハ皆大なり種々の脚色神出鬼没奇々
妙々の大場其奇其妙をいふととととと琵琶湖を一
ととととんとととととと奇勝絶妙なりととととと
筆ハとととととととととととととととととととととと
感心の條とをいふととととととととととととととととと

○縁連毛那あまをいふは怪を同するま
毛那前輯既に逢後の子と名告るれども其間
参りて遺腹のゆゑといひ馬加を討つるをいふ
向ひ参る火急の場といふ必ある事とていふ
るハ翁はかいて俗談の朝腹を漬ふれいふたて
も中々れとまり同考の一感○猛虎三方寄の
配り勇のまゝに軍陣に刺くるほと知ふて其に
の者あるに奥よりみく猛虎は貫目を討つ
る即毛那の貫目を信するかくて其三方寄見物毛
那うたゑ危をむふも大田大川両勇の助けある

いふる一はとていふる一は昨日と芝濱
大塚大山の出端ありと彼れと此れと其事を異
さうは相觸るるなり況や大川を救ひ庚申塚と
事大に異にかくのめく大士突然と出現して大士を
助ふる数度其を其出端毎に教をうへる
ゆゑ○既済電鍋の水火をり駱三六の名のつ
き鯨悪虎いふとて○太田大川電門越杉仁田
山等と罵る言電門は袖號をいひ仁田山は鎧號又
是等々討つてみたりとて同く同く面白
仁田山より越杉の後隊なりとて同く同く

よりて其れハ只後やうに馬を扱よといふ後
 ハ晋五と見認めて戸田河原の十條兄弟の事を
 いふせられし其御定の精細さよ仁田山十條の言
 なるハ見知りしるふく此れをハとてさういふ
 つらとを先く其るをいふとて奥ハ犬山
 討てて十條の首尾を合ふれし精細く
 ○毛野猛虎の戦まの猛虎の貫目とてさういふ
 犬士を鵬の小様を捉るめくふまひくそを修煉の
 白折とて一蹴ハ蹴外しるまで毛野の貫目ハいふ
 重く猛虎ハ勇ハく河難といふとてさういふ

復讐のとうもいふく勁敵之縁連毛野の主敵
 ハあれと元来毛野の敵手はたれハそを討て
 むこそハ復讐までして花あは猛虎も毛野
 花一段こえて此復讐ハ伊賀越をこえてか
 ころとてさういふ○毛野の孫とて若黨等
 を撃散しし妙に飛破の術ハ水滸中も一つの
 こととてさういふ奇術こそをいふくつさ
 馬張月の紀平治あれとてさういふ花やう
 ハ大中ハ必此術有べきとてさういふ其
 事あるとてさういふ犬士ハ其本事はまうある

精細
ゆき

ほととぎす此術すてをかる可無うしあるべしや、
此傳も結局迫くたうふれい今ハよ此術を使客傳の
復市よかどてうふれと猶大士も此術無くてい萬景
の菊楚辭の梅とて何れ漏脱みせべきことをてよぬ
よ出されうふさて近編の飛磔修煉の復市
あまうふも毛布も修煉も他編といふも相重うて
かううしと彼ハ修煉のゆめうふ本事此ハ一時の
さそくもやうふて大士も又此術もやて漏脱の憾
あはせられし妙なるふく人ハさすていおもや
あまやあめいおいてハ深くも深く感賞やう首級

首級
桂子と日考

の撃手眼飛磔の一變うつらぬ○前もいふ如く縁
連ハ毛野の撃手またふをやりとて手も無く討ててハ
年東観てやうく討めさせしう誂うともんめれ前
編も末より此編も乃ひ刀鎧をあらせりてふも
電光月影二龍兩虎とて花こく書成されて
経連腕れししふ後隊来りて三方をすも突
崩も二犬のさうき縁連腕は倒るふへ懸掛い
して一更戦れををて縁連を我よりうつて又むふ
を討めさせを遂るも真に自注は書あり如く
三方四方のるを登きしや唇集へるふれいりやかしこと

えりき

こそ自然かき文勢もあまきなりとかくめく
かれを事とせりしとるゆゑ縁連はこそ世に
をあるの復讐の文勢貫目ありていふもせし場の
一主款討ありし甲斐も見やうとるを文勢の
自然と自然とせしやうとるを看ししもの
あるをこれとせしやうとるの復讐と相解と
しと命とぬ○法号の小幅は首級をき向う標榜の
甥枝伐株時よりつての道具建ちやうとせしやう
えよりかくあるをなう猶越の深きと常きを討
しる時にかき標榜はあまきなりとせしやうとる
又常き一家を

えりき

えりき

血をやりしをいふて自然とせしものなりとせし
又義母兄弟も共にもいふて実母も許さる義
丁寧かきまては教深く看成さる誰とせしやう
へきとせしやうとる大角の木主の討しとせしやう
○大田大川引返し来て毛野の物語三人の向ひる
簡よりて意を盡し猶安曲はは林に居てとつた
ふり又毛野と大村のりをも向まほしと思ふ
例のふりとせしやうとるを風を
○此は又竊に思ふし何れは小文を引返し
来て道は鯉寄の伴當の逃来しとるを刺果しとる

をいつ是例のそれいそれいひて居るや華ふそ
何れと最初猛虎も手配大右の道に迫るもの
度々れと騎馬の三人は多岐を迫り我は近き田の
畔を走る向うされを又ハ先大右より昏とれを
戦の突ハ猛虎の中路先あるんをこれハ田川大右の
敵を退散し帰る道まで窮きり残兵も撃散
ししうしてハ少く遅速の合さるやうにもろん
自注云ふれいやく三方一時勝敗まどく間の
前を前と後と後と優長又論する所はあじし
さる是等の遅速といふハ猶其実をおもてさる

机上の宣諭やえさるそハいあれがくあれ今これを
いひみる例の宣諭を何と云ふと毛を吹疵をも
ひふふと只かくまでもさるをいひて見るとさる
証として一矢をさるもの○三ハ挑戦勝敗一瞬
さを自注云ふれいやくいと長くもかきさる所
長々れいやくせハ強弩の末も方々を露したる
め不無く行を逐て讀まると三方をげりさ
突戟を眼あは見るものておろろいともあは
奇事歟又威を今といふんもことあはる
○晋五主僕馬とらる生物て退きける此隊ハ大失隊

そきるぬぬぬ○定むみくく馬のるくくく
現といふんは後度の注進諸勇士討て以て外の
るはあれと敵國よ合戦敗せ引上難義はなひ
あき既み定む言ふいふ畢竟使を途中に討た
樫也見を捕へんとてまねあふ調あふ加勢はれと
人殺と増へる隊長をつとて入るくくく官領居
城の膝元其頭人は命をき二の重臣ふくくや大将
お馬あふくくく道るくく配も加勢は城中無
勢の虚を討んと謀るくくく是あれのるくくく敵の
皆あふくくくくくく定む軽くお馳あふくくく

ふく人の
おせき

ふくい樫也見ハ猛者やとく三個を捕んと二三人引
率ふくくくくく又重代の兎は太刀よくくく
我装もふくくくくかかぐくくくくも有へき
猶然とあふくくく脚色をもおふくくく又も自れか
るべき勢をもおふくくく一足脚色をいふは定正お
輕平あふくくく河鯉若諫義光返忠種この貫目
ふくくく又定正出馬をくか勢のをもかしては道言
謀りる無むかをひふくくくくく主おの在る城へ
おふくく寄せたる人ふ二勇といふくおふめき必勝もた
くくくく定むくくくくくく二大の勇をて

常備軍士の
 陳名則是
 定正の研
 とつたれ
 多辨を結
 ちて明
 段とある
 大平の

城を落し定正は追ひつゝはとて人よは道言ふに
 遂めれと信乃ハ副お助力を別目立つたありし
 猶攻城の迅速より諸大こふく来集むて共は
 攻るやめりやんとも其つもの脚色ふくたまふ
 そふくはやめりも脚色いくともあへきふれと今
 定正の馳あくる道言ふ意外の使をいへばあまふ
 討たふめ信乃ハ其意は城を落し一ものものを奇
 功あり勝敗よく諸大士の来集ふともいふものハ
 二方三方あつゝ其手くの勇あつたあり其先窮
 ふ及へず不河難々来れ救ふも守如く進忠なる願ふ

孝義とてふぬ教ふれふは定正を馬にさやでた
 めしに又我はあつゝと免る者一入用へ免る
 も不恰好鑑我袍具さてあつゝ藤巻の名刀
 用はあつゝといふもの文の花あつゝはるべき免
 の討もあへきとてあつゝ其免るは累して
 重代と太刀の方を書きかき奥免の委細を定
 正といふるにそれらの件もあつゝ一り一言き
 てるてあつゝめふはきやうといふといふと
 又るといふして又自然といふハ官領の重
 臣い旗下巨田をうへ大石根角ふれあれとみふ

とろーと兩人をまへ毛那を幫助のも配あてまへ
田川といふめくそれとよハ及そつてろよ定むを
討まけろ自れに臨戦せろーさて定むを討
んはろのそよろの配し主たるやれ先道
節の隊をへまを應えまを討まをろーめを
是ろの両士を討あて見おのき外しつてまを又
此飼村毛那めとろよあさろゆえいつくまをそ
と見おの知ろろろのつぼのろよはろちーい
ほろまき外過まろろろろのていよと而し
○道常ろのての手配ろ一分二重違ひ無くろめく有

ろろろろろろろの違ひろろろたろろことく
いよく郎方の使えとろろて謀ろろろろろろ勝
利をいよまをろろろろろろろろろろろろろ
軍勢の測ろろろろ味はく感んこ○毛那を幫
助のろもあての四武士田川は後ろろ無く飼村は後
卒あり後ろろあれおのつろ其伏所はあろろ殺
かろろろろろろろ田川の両士は一身をいんろ
ろろろあれ其使え、助けろろろ使ろろろの使えろ
はろろのてろろの面談あて使えろろろろの手
配精細ろろろ但ろろろろろろろろろろろ

ほとの人やハ多分かくるも居一々ぢれハ意外
の如くいふべきやうのとくさるゝ入るさへきりも
あじ猶もいふ人ハ飼村後幸敷人をあて伏
して幫助するさへハ手配厚きところへきりと
それる其場はあてハ毛羽り勇力であるけけり
やうて多勢ハ用あつても田川ニ士をてするけり
する毛羽り勇力もあつても二士の勇いといふ
ありさてもあつたの飼村も定むの大勢はむいその
勇を引くけり此場もて七犬士いさる主副の
ちめあつてもいさるけり無くあつて本事の

ちやちやさう一人と重復なきめ、後め巧自
在筆 ○飼村は道常の後継の一陣たるやと
告めけるふかくそ告るべきやとてけり丁問を
煉馬とてあつた士といふも道常ハ言を
約束せしこととめいさる白井のりといふとめ
るやと文の引分例なるやうにけり ○此
西士も諸點も定む歟といふやめける大々
の軍記なりめ削むといふも扇谷殿と見ゆけり
なとあつたをかく居るけり後継とあつてや
けりあつたきり ○一個の大おろとも頭領とあつた

この史記は
ふれり
主ねる大士
あつた

又巧也

あはれそのまゝしよ執あゝふゝゝ道き馬そく有
へうにさうとそゝあより道き一人馬あゝんをいうと
猶穂北より馬とを執りしよさくもあゝいゝさうて
丁度仁田山う駿足と奪ふて来さる妙作累さう
して猶又其馬と奥は再び用有さるる事ありと
感ふこと○落點う一働さる軍人さゝは違へれとかく
あては有へうに渠も一個の義勇の長者大士を助勢
の今の一帯船なりたるも富者ハ遂れも目もも又ま
豊かきとてハかゝふくばさるる勇しを軍人ハ大
山う深慮遠念ハ落點う勇敢をぬくいふしかる

又巧也

へくさうして猶奥は又遠念をまゐる大山う軍は
の嚴正不平をなすも感格さる落點う美又さる
の身同よせさる段ぬをいひぬと落點前ハ戸
田河原直折をさるあゝされとる一隊の頭人ハ
て定むと一たゝあゝ大士ハ亞くの一追討さる血氣
ハあまのこ違念やゝもあゝさうて思をさるる
一さうささへて一個の地煞星夏行と二人ハ此場
の一役おゝの二死あゝて書さるゝとあゝあゝその
さゝささる秋さるいゝあゝん○ササ子城の烟を
又せらぬる危急のさるハもさるゝと大塚さ奇

又巧也

まろや妙譯

見ゆ

策時刻の合訂まゝなり定正の河鯉の良言
を用ひしと悔ふことなかりんまゝなり有るへく
その悔まゝなりキツカケて忽ちと河鯉の救ひのあ
まらぬぬこゝなりろー○飼村二大救ひ名はく
河鯉ゆゑ詭計なりとならひて兵をとりかゝるも
ゆゑ先声人を奪ふ是まゝ河鯉の出端の二花
されと又二大も假るおれあやそそてふもな
くと團扇を入れろ猪細こ○毛野莊介
小文吾う躬方ニカを令えんと来るは早く我とて
躬方終わぬ述を止む来集つとせぬる田

譯しゆ
其肺肝を
る如し

川二大はもかくも大坂は定正の軍勢一騎も討ちの
用心深き風心こゝ田川とて既よりや鯉の残
兵まで討つてゝろふのこゝろなかりと又
討て何のえあるもなすゝすゝすゝすゝすゝ
すゝすゝすゝすゝすゝすゝすゝすゝすゝすゝ
言ふもいさゝか毛野は定正の我は公
てろしゝもくも深こ○毛野の道なりと
とめての理論信義を立つた道なりと云ふ
ゝん四犬の感嘆凄涼なりと舊識の田川初
見の飼村就中と拍子よく初見参り口誦よう

此間とるあゝまゝに孝嗣二大の同ひるへいと
むろろく入組て責恨と言ひ解きせと英士
ともの同きまはよくやをハ様とらんろくめ文
まそかど人ハ又其妙もあるまゝなれとれ此妙は
仇男やふて毛那子おハ同ふとなくあゝとの
説話を同ろてやゝと恨みを解くとして疑問ハ
道言ろく人ハ解せし此仇男の至妙ハはさく
へうとそそやもろくめやろくあゝ〇便捷を旋
し胤智と刺錯へて其首を死ねる守如く遺恨の
ほとやいさろめあゝれも感懐ほくめろくめやろく

〇孝嗣大山ろくを同きまゝに大山ろくを道
常ハ胤智のろくをすゝくと存しける例のるまゝ
とろろそりろめろくもあゝろくあるろく二士を名ま
して請ひあやを二士は同ハハをようなれとすろ大坂
を主として同ふこゝろの疑ひ同ふもろハ大山ろ
くなれとろハ毛那ろくろろてまづそハまゝといふ
まゝとろとまゝとろて大山ろくろくみるろろろろ
まゝて道言ろくを場ろくハとろみてけろ果敢ころ
復讐の自然の勢ろくもあることろろて道
常ろく今ろくも解ろく毛那ろくさいだん田川ろくあゝは

さてよくおまへハ多此使をくハあめからよきハかあふ
あしたさうシ確目前なるにハかくてさうよハ烈女
忠臣感深く懐深ハあめをせむろハさうハき
言ハあふれとせむろくもかきハあふれハかき
さうハさうせむろくもあふれハあふれハ
いハあふれハあふれハあふれハあふれハ
測ハあふれハあふれハあふれハあふれハ
をかくハあふれハあふれハあふれハあふれハ
猶ハあふれハあふれハあふれハあふれハ
やうハあふれハあふれハあふれハあふれハ
段切の孝嗣

精詳

言詞義あり勇あり理あり礼ありかくけあけ
いふハくさうさう入てもさうもあふれハ
敵ハあふれハあふれハあふれハあふれハ
さうハあふれハあふれハあふれハあふれハ
尊論ありし答礼ハあふれハあふれハ
さうハあふれハあふれハあふれハあふれハ
とめさう論ハあふれハあふれハあふれハ
答礼ハあふれハあふれハあふれハあふれハ
子やうさうさうさうのあふれハあふれハ
きと大士ハあふれハあふれハあふれハあふれハ

あつてまゝの轡子とてあつておゝはやくもさして
ゆゑとて教とて教とて用道具とてかき成され
一筆のさくらまゝ巧のめけをさして威風の
るぢうとてや

九十四回

和殿血氣の勇を負てて退くを看更^{の言}とて和奥の
忠孝両全死せんといふもいふ言も有るまゝの
お條者嗣言と詞と忠孝理義のことの事とてさ
は血氣の言詞にあつていふは何とておの耳にうや
おほゆゑ例の穿はるるおんう○採受の論

お夫人お受の二人おきては何とていふか
過とておとるやうとてあれと其定規の直正なる五里一
のうゑいしあつて猶おかりてさしてその機変の害
教^をいふれとて例の公前のお受は是文外の悟道深
意はよきうぶい懐むとて禍鬼の来ぬを推
いふ今忠孝両全の理とてさして毛羽の論
とておつとてさして毛羽の論とてさして毛羽の
をとおつとてさして大山の方人たつとてさして
言は既に前よりさして忠孝の論とてさして
治家をいしてはあつて又奥は既にさして

はとろ病いゝとてあうと又諸元をせと諸城の
後詰の遠慮を諺とては義也義のたうりけ
其天秤のふんととるぬやうふく威服とんぬ
今やと○毛野の理言は孝嗣の服してそのまの
退きてほの子おも方なきやぬを狂まぬ一トと人
いよく以て教さぬとふゆゑ退きてハ理ハおはうは
孝嗣のみまほしきとふもあんなきとて孝嗣の
前後の思慮とて浅くぬ智と人みんていよく死
あり征前一條もはやその椿樗の樹はた矢也思慮
又寛屈のそハ暗は後巻の観念ともてふいふ

神々々々
至る如く

誰りゑんきさてお推辞は毛野の再論の順とて
みハ又道常早く切上げて例の言葉は會釈無く座
き中ハ味あつ教さまきぬあふとやとて我馬
をあらうる也馬眼も切あり用あふとらう人のま事
たれと主とゆふとハ盛んぬと約してとつとて信なる
馬也て功用あふとらうぬの段取うハ又馬も盛と
卒然やとて彼議ゆふと推辞をうとふと信と
は奇とぬとみゆとらきかる巧ハぬと又ふとて
あふ人あふとや馬盛のさうぬとハくもくも威ん
威服○孝嗣の騎射の妙教ふとふかといふぬ

奇め物椿のささうとさくぬ送具さくくの二鞭
ハ長幕中の下幕切面影うふしろをえんか
るくさくしてさくはさくさくさくさくさく
村壁目前河雞父子と感さるる野誰彼の評は
及つ即作者の品評せぬ的當何の言をういもん
此大士さいどんやうかやまきしてあめゆえ
るよさくさく評あやそむさくさくさくさく
らぬさく野四口同あつて二士かうりけて言罷事
ハはいき評のつさめ例のさくさく感さるる○大士の
隊は入ふきよの道風の言ハさくさくさくさく見おもはる

其意ふお場の孝嗣を忠なる義勇ことく
大士も伯仲さくさくさく此さく一人さく大士は
おさくさくさくさくさくさく大士もさくさく
さく孝嗣またのさくさくさくさくさくさく
さくハ文ハ道風のさくさくさくハ愉使の褒詞と
さくさくさくさくさく中候下院の褒詞とさくさく
さくハ誰さくさくさく○道節をさくさくさくさく
孝嗣ハ感賞さくさくさくさく道節例のさくさく同法
ハさくさくさくさくさくさく二人ハ既同幕中
感賞さくさくさくさくさく四士の評はさくさくさく

清
評
の
ま
い
り

かくと賞めいひていこもなむなり調子のびて文も同
話のそくやあんなほよきや上々ぬこと○道
節いさふき猛く有種か違令を請責いふるに
はるるやいふとは是主帥のあつたす賞罰訓ゆひ
なきとちの殿もことよ書といふ人且るは頭人
たる有種をきたむハ即諸卒をいふしむ推をも
こめしあ人きうされいふるそハ里日の衆議よ
と幕を引後日ハ礼謝のみしむを諒ハふしむ
あさるるもあつていふさるるして有種ハ不平
はあつとやう又さうしてすし教服せると有種ハ

美あつとちるる既ハ前ハいひしう○毛野有種ハ
ぬまの道節あつた大士等ハ芝生ハ坐して腰兵狼
躬分の死傷を索るふと何う何する漏脱無き
るるいふなり○更話表道節を野又四犬士
そめとの勇武ハ一段こととさるる是より信乃の段な
むハ信乃の主たるハ勿論なれとせし道節のそめ
かてハ前後の約束あつた且機ハ臨みて道節を
手配をえ易しる既ハ前ハ其よりいふやあつて
見物ハ知らせても方々いふと再その姿ハきこ
かてハ事の粗ハ似たりようてそめハ修けり

されはるハ道草や主話のやうな事あるも然よく
讀みよ主はあて字話を書するの文の主客
事の前後ことくはまゝを用ひてかゝぬことハ
無きそなり
○信乃々奇策又ぬく七武士誰
彼といふはあろハなれども信乃ハあつて是役者
あつて了副とあつて一手あつての奇功をあつて
道草ハ定正は追つて主仇を教へ信乃は城を奪
て四難言を雪くおとぬむをつけぬぬあつ
つけぬぬあつて煉馬の残黨も我も亦ハ
飼村ニエうと同一く理義いつくもさるうふ

○外道ニてハ見おのふつぬ一平すておも
えろくつろぬるるヲ猶例のるるハ這奴仁田
山の奴僕もつてさるへまに仁田山井子の城中は
在といふも巨石の従士なり其奴僕もてハ今一段
見認あは甲斐無きとありうて越杉の鞋奴
いへて年来城中は在るものせぬうさて口ハ
越杉の鞋奴もてさるへまに仁田山井子の城中は
のよういふとれは是外道ニて畢竟ハ佳とれ者
うてさふふと命とどの言種よりふさむいふ
こゝもこゝれらのるやて華勞構思をさすもれ

せらハさうといへ○いふふを討れ猛火は度と
 先ふと二三千人とあり城兵中少く勇士ありき
 は志意ある老兵そのもと何と名のあつものなる
 きはあつりみえつぎはつとあつり人もあつり
 こもいふ者筆をとりてあつりいふれとて定正馬
 前の地上末廣高四郎三佐吉郎のあつり名ありは
 るは主はつりめ忠士もあつり討村はつりと討て
 二男の花もあつり名をくはつり又鳥首
 るもあつりありあつり二三個の勇士をいふ
 きふをあつり討てつり外はあつり

まゝ一信乃ハ奇策ヲ城ヲ陥ルニ十分ノ花ありと
 ぞめハ討る討るて不まふ知れどぞととる
 ちのかさそ筆のさるけよりて一句は勇あふは怯し
 くるも其侶よとつても有筆やぬくぬく又勇
 怯忠と不忠と一討也は二三千人の少勢はももなきハ
 定正暗愚軍令紀律乱とてあつと文外はるせられ
 くるもなめし
 ○守如美ハ鍾日前まゝもつる惜く
 ありと自盡せんとハかたす其悔其恨誓いそ
 くるぬゆるくもあふぬく慌を怕むとそ
 其死をいふ是又死期の費目のめりてとるぬ

作のり

死其方なるまあるとる防衛も死戦もよる暮
たるとと捷と痛は臥あると一段そのつふ
よぬ又まやれ一のふもく守如大政は談
機密のそれより主を死く城陷するその様
変の害ふく突ふ不意の過ある自殺して二筆帳
其過を消しふ忠臣の助定はさみりさうめそ
是と帳しる何の餘論もあるまやめをけし翁の
筆法深重筆目前は自殺して烈女の筆帳皆然と
守如は定正を危くやの軒達し置きおきてハ一
忠臣清美とくして名尊智術の美引張んこと

作のり
あま
あま

ろで其子孝副あや遺令をこ轎子の四輪車
高繩の阜の死孔明敵を挫て主を救ひ重を救ふ
開平開主奇くぬの筆法ある孝副あや
あいのためのとく後回を推量るよ忠臣の後景
さそのん筆法いふ奇めと○繡像ハ画面
の花あやとやふ又ハ画工の意よりて公おの稿は
透ふあふふのそとわかくと評するもあふ
と下手の長談愚評くどとて肩つて
間々筆やふ画面の評をいひてつる七犬の
場のみお毛部ハとて敵討白帷子とあふ

道常信乃の軍装これをもろゝあうまゝ道常此日
のさうなハ大おさまも画面の花うハかくも方々こ
信乃も甲冑あうまゝをの奇策の難兵お扮画の取
合もおやろー徒卒さえて鑑むれハ田川飼村もろ
ろんもて皆そのお扮あうまゝをのさてハあうまゝ
者人形かゝるまゝ也四六毛羽々幫助のまゝなハ
あうまゝもやれーぬーそれおやろまゝハ子ま
はるも毛羽々おの白帷子ハ田川ハかく飼村ハ
徒卒もろも勇戦のかの圖はかくぬもあうま
まハ四六白々て紋あうまゝもあうまゝん

ともおととけおとよは後辛鑑の頭領の鑑あぬいされ
 ていふいふい紋柄あうとも辛辛百歩むえいふ
 ともいふいふ鑑よりけ幫助へうつけてえの白地
 とすともえきうさうえその歌歌方後辛同一鑑
 えきうえういふいふいふいふいふいふいふいふ
 かのおとけのうつういふいふいふいふいふいふ
 かとういふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 おとけいふいふいふいふいふいふいふいふいふ
 幸ハとていふいふいふいふいふいふいふいふ
 の幸とていふいふいふいふいふいふいふいふ

例の理
暎り
ふり
ふり

仙道心持
多しとて
れり何の
故とて
可と
多しとて
多しとて
多しとて
多しとて
多しとて

いんその大村は二三角不血痕あり大飼はそのと
そそ大飼は鈴も今織手と定んとそそ大村は
仁本大の首を撃つとそそゆえ其血の途つぎ
るそそ画工の細事あるも邪々後述を研
修せしそそ又そのるの血痕ありそのそ
細ハ細きれとそそ何とそそ負とそそ
又そのれハ細ハありそそ又大村は鈴を刀
そそハ今そそとそそとそそとそそとそそと○信
乃入城しての所置ひそそとそそとそそとそそと
く理義に急あそそとそそとそそとそそとそそと

精進甘心

ちれとそそとそそとそそとそそとそそとそそと
里正們を喚出そそとそそと細きそそとそそとそそと
そそとそそとそそとそそとそそとそそとそそと
正故老們をと頼り便利あるそそとそそとそそと
城中一日と通るそそとそそとそそとそそとそそと
おのつそそとそそとそそとそそとそそとそそと
清白信乃のみあし程無く来るそそとそそとそそと
ろくそそと飲々飲すぬめそそとそそとそそとそそと
あめハ飲食そそと飲めをみそそとそそとそそとそそと
水辭の諸豪の所行とそそと各段の違あり公府のそそと

用心筆此一班もいふ事——○信乃る壁書ふらび
又改同の道書ふ添筆も當時の事といひて
俗用の文あるくひぬらるる事いふ事記録文あるく
此文貌はあへんはふも是ハ初編のみの境田
の撤文も同じく此體は皆同じハ本編の文系す
てさふ事

九十五回

道節の堀を毀ちてハ暴は似れと復讐の貌
意これ無くハ有へんは信乃大角の謀は思ひ
思ひ返すといふは士は争友と喜むといふ其本

然信乃大角をいふ其賢其理いふと無一同論を
し乃と角と言をくして趣ある例ふもあらず
○大坂大角の復讐言の成不成の論大角の言を
いふはれらる當らるる事又大坂大角を相せ
し昨日の事を再々出されは是又大坂の首相
を借て昨日の作者の神機を洩し今日ハ其然る
を弁せらるる事——○大士の文武ハ師傳自得
いふ事いふ事——○大坂の假りの世三才枕
大刀の奴はいふ事いふ事首相まで神はハ師
傳り自得何のためかくまてまひひてあやう

いふことゝいふことゝ是又例の妙用と神仙或ハト相
て事ある人の始終の人の定数あるを云ふことと
るゝ実相も有りまして猶演義小説ハ何と
大山と復讐言ハ容易くぬきぬきハ始終いふ
と又物もいふもむづかしく以てくふも然の一定と
ありまほき一ふしとふハ凡作あるハ何神仙と
何ト相と云ふもの人をおさへきよるゝ妙用
妙用も後ハ又用ある一時の用ハ人形教みゝる
多くいつゝこれを山坂出會の妙趣へもゝる面識の
ためと云ふより物に假の所業も人相手の筋

神
純
創

似合くゝる神仙ト相役を兼せよゝる妙用
妙案其用ハ大坂毛野々者相ハ著作堂先生との
間より教授しおゝるゝ猶看相の妙のこゝ
相学の卓論まで言の序ハ述させんと研究させ
ゝるゝと一しとさハ時より事とさゝい其たの其
用ハ大士ハ文武二道ハ限らんや何所何藝今もや
る博識学て蘭学も教てゐんもさゝるゝ
これ今之所傳非古之ハ大士事也○大山と壁へ追
書せりおゝるゝ又おゝるゝ一呟言るゝゝゝゝ
心もさゝ後方やゝゝゝの文ゝゝゝめ之信ハ里奎斗

神
純
創

道言ハ蜂里空例のいさゝめするも意をもち
 られさるる此前後の二文をよきとて四士落點
 それぞれの歎唱を以て自賛あるハ又さうよ
 子及るにふ箇所して理義つくせり虚文あり
 ぬハもろろんまてのハ士ハ行の字をさるる巧
 又せられさる文筆のさるぬといふ一〇大江
 いさせられさる文中の仁字ハふまて平一大江出
 現るらるハまて有まると誰れもハ此場ハ大江
 意もなき此文中の仁字はよりさるる大はる
 今此は具足のおもひせらるるし是文外自れ

精細

の余情歟〇外道二の結果百に中もまハる
 即時の算帳これ一きみ小出入まで勘定さる
 ぬ例の精算〇晋五を蹴リ十條兄さる然と報
 するも責る言辭の理義明く實は隅々隅ま
 て手のさるる不さる一〇定正の盛あるハ晋五
 織平以下の首級を鼻くらるぬこと一〇白井
 て實は本意を遂たらんハ首級とて君父を尊
 るやう一〇さるるハ要るものありて鼻首
 て怒を雪む復讐の意ハかりゆと大小あり時
 勢ある歟白井ハ殘黨孤忠の刺客いさるる

精澤至妙
當にあらむ

よつてハ刺錯へとも死て本意ととも一々おそ
遺臣雪怨の義戦若居後類併せ撃て堀を
毀ち塹を埋むるといふ人ともいふいふあり
煉馬は遺主のあふれを再興ハ出来されともいふハ
らく道さう意中は主家いまだのむい敵国主従
の首級を梟け雪怨征伐の大義をえとらつた
一個身も仇を刺さともハ事も知らしむるに前條
毛郡も向とも事をかくて討やうとて味も自れは
有らぬといふと其味とてらるるはあしし之れは
梟首ハぬく浦人は煉馬をきて送代めを

命もろかの大義を公し又明日めするとも分附し
孝副の約をかくするふとてかくしおろし
○盜を首級に代へて梟るる道より復讐の用
目も實は奇絶の妙教く大士出身大士はあて
くおとて報さへハあぬ讐言あり其る成りてとてあ
て後み里見へ飯さるやうてハ其行其美全とてさし
よつてつゞく其事を成りてとてさるやうとてそれ即ち
編みの脚色さう水滸武松は兄仇の外損くさう
私讐を報さるもあぬと大士ハ犯律の罪徒劫奪の
好漢忠孝大士の如きハあつて是れと脚色の果ハ

評ゆき精
細

あつて本編の真面目なり大川其人にも
あれ假りも主仇部日は報やう大村父鯉より
ともせし大坂はともらん大塚まともるる舊主の
怨を雪きしう大田も私鯉ふく其報を傷まあ
つて大山も鯉ハ就中事大いへ大坂も容るるあつて
ふハ二武士出身のともくうろ千慮萬計して
事を成やう其成しう二士とも同く事ハ二度
して其事ハ同くいへる其脚色の奴をもと
よりまた又其理をもつてふら大坂容るるやう
二大敵ハあれとえま順を以て逆を討てふハ二度

鯉金巻巻
九代あり
実録

ハ一敵くをせふあつて討てう大山ハ君父の大仇
討へき忠孝なりとも順ふれと定正も煉馬を亡
たハ逆はあつて猶いへる逆ハ煉馬はあつて其ハ
順逆ハともくかく定正ハ管領うろ武毛信
頼の大家うろ馬加竜山は同くいへ又軍記
實録等も定正と孝の正記もあつてうろ大山
を討てるの畧成しともともるる一姑摩媛の義満
とハ事のもとも大も黒くあつてうろ畧へくあつて
あつて以て此後鯉ハむつてうろ畧もあつて
ふれとも大山も此後鯉を逐てやうてハ大山も

大山たるを奇絶の娘殿を白井の二回村雨の
刀の謀慮おちめく迫つきよう一刀は刺得たりや
誰とあれ定正は扮してあれハ即其場の定正に殊は三宝
平ハ父のためいさゆる當の敵なり但し父のためは父ハ
定正こそ其君父の大仇なり定正を討得なハ三宝平
を討とて孝缺しとハいふへくはさハ道こそ定正
よこそ百計され三宝平ハ若くまんまゆる當の敵
時あるれも又討まくほくハおもてやもさうこそ
この假定正當の敵しう三宝平はておもふふまハ
ふとのとおもふこそ父仇を先討得さやれ忠孝の

精の又精
全物の母
鳴手誰か
らんや百計

精細大義の間配り深くかし威服し前より
定正そのを討て先一度孤忠遂しめくすして
毛羽の對牛橋は討たし此は二度計兼軍配
おちよあて定正は迫り寄せ其著る重代の盛を
あやく射落ししう盛名置たりとハ定正いふ
死も人きこして盛を鼻て辱しめ怒を雪き恨を教へ
實は首級を得しるは因し道前々復讐ハこそ
いふて遂てう遠やう袍を刺して身其死に
豫讓とハ幾万倍もやうよく二盛を首級は代
らぬる娘殿巧き絶えそのをあらはし今一時

信乃ハ居城を去られ夫人自殺シ毛野ハ股肱と
モ勇臣智士を討ト定正ハ家難也ノヤ有ヘキ
是マシ道節ハ軍配トモナレト云フといひ
復讐言ハカクテいフ甲斐アリカハ
復讐言モ又大きく全功を為シ之れハ只定正
トハ之ハ管領大家大士トモ討テ残黨
孤臣ハ討テヤテハ余ハ事ハ自由トモ
無味ヲ云フ一々遂ナクテ遂ナクモ
ヘクモ深味奇ヲモ知ル威服モ猶又撃果

さうして死なんとあゝそそ頭痛一旦治まるとつひに死病
の根たる飲或は一敗ありつひに再振ふを在さるゝ死
やめくよとある飲るのみ誰も推し及ぶところいふ後
同意外あるぬ結何とう有るん○毛野々舟を棠
浦の沖よりひくをて神太示川の方より漕ぐる遠慮深
謀るやうに外人の作あるのみ舟の歸路なとハ
何事無く昏るも有へく又おとる別段は意思を留
めんとする事もありしをかくるやうな深慮用心
ありと遠く漕ぎ一日を暮し一夜をこむるまで
舟中の程長く酒食ありいは何れかの設話あり

るも都合なり例の一用のみあつて二用は是とある
さうとハぬし○毛野信乃々諸兄等の品評言簡
明て是てを盡せり但一大河の行帰塚をその並
よかきかんはさうく飽ぬともあるのこそはさておき
大河は品川を路點名告やせりと阿や小と云
を毛ぬと云く其るは向おきと云ふなと奇ぬ
精細系それ智の毛野ははと云ふてあやふ
と大河はせぬはるの評は大河を其才と云ふ
ふそのうと云ふやせぬはるは精細ぬ
路點かこて名告せし居る其事はハ意ある

ともて居點ハ不用意歟——見物猶てははるき
 つう——系々名告名のやむハ歌子居所を知られ
 知らぬ緊要の大事なりとて二士の言無くハ
 落點ハよりくおくえおるる中より精細深
 意を知てやるべき——くもくも精細奇奴又毛那
 落點のきとをてよく問かきしる卒然やとて歸路を
 知るといふ所を遠くひくほととせハ遠慮毛那又
 してかきとて其るも問ふべき大川あやさハ毛
 那々遠慮よりうつむるかぬようそとれぞう彼ま
 ともく都令何う○改回大のるしあやさきふ

佳評

理評
 去人但一正月
 下旬
 へ大抵冬至
 より五六十日ハ
 歷さん

日長きも暮さて此日正月廿一日いまだそくハあへ
るに併しこれハ筆たふハ古抄語はまゝある
うへきものもある○定正集前ハ頭痛を
倒臥しておはいと云後ハそれ快事と孝
嗣五子ヲ往来し高瞻として盛を取つ蟹目前
の義烈を明し守如の自殺を告て吾身の刑をと
る不と云て理義明白其餘はこれ孝嗣より
事と言ひともめハありしさて定正ちや
愆を知り賢妻良臣の死を悲しみとみ茲サと厚
く孝嗣を賞して近習と爲さんとある人々の

忠の筆久ハ又負霊忠魂と歎むるもして
昏と一あんなかくあふといふ定正の憤弱不
るさし必死を救ふ孝嗣とてあへて褒賞せよ
めりといふ病卧ふあへて其見参るといふ
さあふもふとおつていふ改過一新して
未遂るとき後同を先とやふふるやふ例の
細筆おろし
○根角谷中二端田取蘭二例の興
あふ名たふ穴栗専作まこと一取蘭二昨日の
朝未明の葉浦の里正とて訴出たりとてハ輯の
その合紋るかく朝まきまきといふ細し

この本は
初巻第一の
趣向を勧
懲まふ
あり

○堀内船中首島木せられ罪要を牌に注され
しるしといふて如く造化の黙契即作者の神
機の懲悪の墨吏們の示為として奇にあらう
そのまはれとて二首の落頭おろし一草庵の
こととあう
○初もつてめくは段ハ無恥の大
場とて七士とてあふ顔を揃るの一結三編の
そくしう移るいはれは大山と大仇の一結大坂の
後継ふとて後同盟集會やんとての一結船
中とて西敷回とて見物遠とていふの要
婦大田大村大川大飼ふとて要婦の毒とていふ

精評
りし

就中大田ハことほくあきなりよりて大田又捕へせ
あつてその其要をきて愉快の半裂一結場内しき
要奴ころ大田大川と討んとし餘壹こころなり
結果なり信乃ち故主の舊態なりしころは一結
七犬士は仇あきなりはきしころはあきし書きあひの爲
へきし爲しころ又夏行有種、宿まの俱ころ
も遂ころ鬼四々新怨磯九々古仇力二尺八々能言ま
ても教するそく皆盡せり結城法會の大結あき
とせしを場の一むしむ同て段くまきあて七犬會
より一大結大可ぬ奇絶の大場し筆しころ一初

よりあかしく大結腹書本は有りんく一感心
感服せしころ名たる演義奇編しころかろ大
場ハあきなるる一

九十六回

孝嗣は首級集替の事を聞て嘆嘆いふとも無く皆
至當とて例の賢導をいふなり愛は一つの鑑鏡
何の孝嗣諸士の忠死を思ふふとて盛ともは取来
らるるふくハ又君前は出る時よりもて其筆あきまは
しきふと言上せたるはしきもあれ孝嗣は迷漏も
あきとて是れは當坐の恥辱とて脚色の人とて

孝嗣は其の
取しる脚色
の故にあき
志す孝嗣の
かきしあき
身方の書
あきし
孝嗣は其の
孝嗣は其の
孝嗣は其の

とも分るる
 老を無(度下
 中(原前示
 新(評老前
 腹(原前示
 とも

ともくこの果表吏們的孫智恵もそ鼻替の思計とい
 ても毒を以て妻を毒買するも二六の奸邪罪要ある牛
 裂きのくをたれ又鼻首牌面一隠悪の罪世に顯せらる
 さまいそほしていふれ如く是造化の黙契もそ孝嗣の
 いふところの天罰にふれ此果表吏們的鼻替も主たる脚
 色造化のめく因目の孝嗣の嘆嘆ハいそ客話にふれ
 又其嘆するところハ孝嗣の孝嗣いふところハ至當勿
 論變道守のわろところをたてハ又客話にいひふし
 いふれそれれもれも教を深重當座の理屈ハうたて
 て此脚色とあてふべきに猶いそ道守の孝嗣の忠

失れり
 とも分るる
 老を無(度下
 中(原前示
 新(評老前
 腹(原前示
 とも

孝も感し明日来て一盛をそれよとゆい孝嗣もさ羽を
 朝する高眼は教きて早くもさうて主吏の死をみて
 くらも盛る肝心余の首級とハなふも子ぬいふれ
 くらも盛る軽くぬえん又定正の懦弱けり忠也
 の鼻首をゆきふもそれぬえセサるの意をあら
 ハ命もせも暴を更うたあふもつは魚腹よとあり
 うせさうらるれも自れ文外の余教ふんといふ
 いそらうも孝嗣の盛ともは皆取ら定正々令して
 厚く蒸するとさるんハ其さほうめるとさる奇
 黙契妙因自教をあらうい深重の脚色ハいそ

そふなりき ○大石は不覺を思ひて虚病して左右は賂ひ
兵糧を動かして媚するふとて此意重ハ篠上西田仁
田山等其従うて其主ある定正幕下の拙者なり
五十子修復も刺薄なりつひは又孝嗣を疎するなり
をへて扇谷の再振をぬきとやれり ○七武士
右種義重義民等徳北は飯りたるを夏行を待よ
るるより坂川田の初対面ふとて入てく見るなり
義民等の門より辞しうるなりしなり
賞金の貽辞たふは實義をいじ留不留の利害お
のゝ理論をつくせる七士と翁塔九人の言辭なる

細評

それは間配り有りてほむいある二人もよく又おのつゝ
其中は其人この類きあるなりとてハねく風心し
又此れを太りたるも或は防敵の計議ふとおののり
ところ其るる面白く道高ハるるも痛憤懲め
るあり是も義重なりし醫師とて郷中は一箇ありて
他は洩するのるやうなる例のくひなり 無き事なり
○五十子君同への間諜見世智介小才二おとろし
義民の中にも有きと義民二人の用ありとあつても
用方の銀を磨くで結ひる事なり役はハ見物の
先刻馴僚の道外方名もあつてつゝとて例の

桂馥上同論

○此僧の無言ある大角ハミよとて維摩の

黙とう挿贅とこれとあひハキもせよと然ら
 うきよと有とハいて一理屈いひみんと筆とふ
 う又せハヤくそハ記あるとふへき示ハあ
 る一世智介ハ此使別ハ緊用の事有るあるに
 大々結城ハ在不在を問ふ事との使ハ言ハ交ハ
 面ハ見せると大士ハもろへておと、大勢ハんと推知
 されハそれと使の用ハさみとろと一ハ言ハあ
 するも知介ハ七士の事と復讐の事四月ハ必と来
 とう會やんとと告げハ大ハ其事を脱ハ七士集

會をよるゝいよく四月は来々あれと云ふまであるふく別は顔まあるもあじさる平たらんより早き、大々在不在と云ふとはそれハよき場ゆゑかくいふぬはあやふくはえちと云ふとけふ黙然のてふはせふくふんうそをいふ例めぬ此界維摩ハ一あり此默ハ多ふとおのふれ移登くかもしハせろん何するもいふべき理ありつゝなり

○夏の聲はあまたよき雅はあに俗にあにみ一家の自由文例ふくぬ感ひ○夏行同候と請大士推辭しゆくゆくは累よ病て同候と云ふ

曲折をまじりて夏行すて此諸無くハある
くはふれと侶はさうてハ又蛇足なることあり
夏行病まで有種名代たうあくる文めあり
まゝと暴病以外の有種と行きさうてハ夏行
たふハ本をなれとやうとハぬは作累せられ
世々も穂北義莊のまゝ一とむきひ供へ夏行の餘命
ハまゝに有種ハ後は猶いま一と結ひ有るものなり
○大士肚裏よりハ不誰とぞしからん時ハかくおと
たりてゆかりを例のするなきやうなふさうなく
おまへハふりとそその顔をもあけしやしもなほ

夏よりなほ六除くまほきことあり○
 佛性をも古人の句々 翁の句々 何ふをて下八字
 并は歌のそとそと六江の出をもいふれと此段
 切の一つの文飾とてそとてわかれり 歌めたるみ
 るめたるを感吟ハいふとそと詩の上八字ハ禪機
 とあるの故事てもあるれとハお人と武士も佛性あり
 やあそとハ禪機を知れ知れへきやうとそと知れぬ
 いふいふたれと英氏の神童出現は抹香鼻きこえよう
 外は何といふべき 犬の故事ハ有らんものをさう中
 帳の扉も木魚あり 印面ありハ此佛性ハ犬江ハい

その由の深意もあらずや○あらずめく七犬士すつ
一むまひふより大江々出石の傳七士六結城を赴くとつと
ゑてろくふ分教る妙巧好筆感心感賞

九十七回

是より大江を説きんとて前回七士を先一結筆をうて
さうよ又房総のるより昏出されしよりいふとすもおよそぬ
るふく大江神助ハ有といと八九年の小兒之志るを
これまでも種々しく忠勇孝義のをくめりといふ
せ書されし七犬と肩を並み英傑とてふも其已に
重複無きやといふ昏といふは容易く且見物し編

乙卯年

毎々大江ハいふと結ぶる本編出を有へきやとゆ
知つていさうな又目を拭いて巻ことと今く待
つるもの出しさぬ殊に光映ありと昏もさそハ成
くくつてあつて大江の出端容易あつてさう
はれハ翁もあつてより此かゝるハ奇案ほつて七士
さきたる先つれを里見へ出して頭切有つとこハ
文通ハあかハ腹業をせられゆきあつてさう
本編其頭切のためとて墓田とくハ一勁敵を出さ
る其勁敵の二乱を昏さんとて先つ里見の治を昏
まゐりさう里見を昏るさう富山とて昏出され

いるさうぬこして年月のうつりあはさう家督
の代替り一周忌の隠居遁世あつて深くまゐり
突然の字義例の深重後ハ毛序のさうとて
智字の玉瑞も深重義實の辛年實記の異
同例の精細丁寧して一説の歳月と隠遁とせられ
いとくあつて自注ハあれと猶もハ切居へハむ
ぬさういさう樂屋落のさうとてさうおのれさう
うけまてハ本義成文武父はさう堅くハ
して房総を併せ一方ハ覇る勢父の世よりハ
すて家國の榮ゆるさうハハ大士の主とて

るも飽きず荒川東と添せし其出身ハもろ
ろんとせし義成は隸おきてる二老臣は立て四家
老臣例の何れ段取あつて是より十二丁
莫田素生の話に分るゝとこの條ハ自注とい
はるゝ如く有経一とを細く累々再説する
るやれと強ふゝと可妙段有るゝと云ふ
あつて猶そのふゝゝ如くははるゝと云ふ
ゝとをせしはやゝと云ふゝと云ふ思ひもさるゝ
あつめと此今吟人等如く再説ハ曲折あつてハ却
て眉よくくゞゝ歎されゝとて歎めと費思あへるゝ

あつたれと筆はまゝとて眉よくくゞゝ歎されゝとて
き間ふゝと退屈なく讀み凝滞なき先文ハ熟筆ハ
天然の妙筆ハ何れも感心○莫田一個の立歎めて
安西麻呂もまゝとて勁歎は眉よくくゞゝ其親も
ア傳を立れ云迹もゝと云ふ二三四はもゝとて眉よく
くゞゝ自注してゝゝ如く王度なと事と同一く又
これ一つの小傳説話且正邪こそ雲壤なれ里見云迹
との反射あつて素生ハ何國の殘黨もあつて何鄉
の流民もあつて強盜の子とせられゝゝひとゝは邪惡
は眉よくくゞゝ股肱も同一く強賊出身助惡を凡

狼の隊とある賢君良佐二代の里見と表裏敵
さるもろろんぬー前回七士と一結ひ是より大にう出
せると今教さるうてさふう筆をうて二三冊より
るる評邪の傳大士のるに一つもくはる他編をん
るめき婦幼にけふおひもさるんと樂屋天物の已きハ
柔うかろうて又興ありおろろーとめておろろ但し大江
と出さんふんん草堂田をかー其裏の素生及後
館山二山のあるさる傳さるは此知へてみて改訂も又元
よりかくのめくあるまゝ文の當然別はお奇の筆さる
あにさるは何よりお有るうそのお示さるていふおめと

此評精細
筆方を最
れさるは

水脚は
本巻は
の夜間押し
又第巻と
さるは

此をみよふと改訂も何故新奇のさるてさる本編の
佳趣とさるり○胎内の子を啖ふる只小児を啖ふ
より又一段の残忍惨毒此奇悪あるのを天刑と
まゝく奇りて應声虫の今一段奇ある果病暴
奈いて其たの刑死におよひる懲惡の配割かくさる
さる路六山よりして手下あるはうて畿内は横行さる
さるのーま巨政盟は昏るれと畢竟草堂田の素生のため
おろろて其親やを昏るるとおれハ寸鉄し帶さる
商人は打扮ち顔出さるや出さるは天刑及びて摘捕さ
忽ち刑せられてさるふやえさる者筆お胎を啖ふ

いふ山評一
ゆゑ平基ふ
るすや
奇しきもの
則奇なりと

の二惡行の極に殘忍鷓鴣集何々せしん木藁の小
杉木の一と働き武藝割桃をうゑる者中の細
も又ぬし山おほくは膽吹山鬼の譚名これぬし
腹内声ありて積惡を罵る奇病奇はるるや
あれと奇をころる奇巧やれ人意の外は出る奇
筆ふま奇しき奇めし罪惡深重天刑も尋常
はあはるの懲惡はあらんやとと路云と又識
者ありて市正は告げ捕らふとと人よは者筆
ととあるは平く鬼跡ま龍頭蛇尾歟奇
あはるさうの巨監捕らるるの貫目もありてさ

畢竟職徳で
つるもの
此の理は
人の理を
あつた
世にそれと
人よと
失れ
理は
物あり

くも又ぬしととやとく以て奇病ハ奇巧奇め
の奇筆なる邪○市正の姓名いともおもしろ
さてあつた面々つとてちよと例の實論あり此職徳
此は路云を捕へ次は鞠問さるる又外は用あつて
只ありては役なりとてハ此はハおもしろとて
おもしろとて似つぬやと有り何とと緝捕使の
そのふはよる名あつたまゝの似合し人き
ふとてはなきをむぬとてあつたは
姓名おもしろく笑ふ入ておほくは
出てふくはとて一時の筆ささひと

詔せぬ一乗屋おとろの游戲とあそび
はいこく奴姓妙名

九十八回

路六伯頼陳見とまれとわの腹中の声と積悪おほひ
くく招罪は及ひ其声止るおとろ一前同人叢
裏まで腹声悪と訴ふるおとろはまの腹声
招いて腹声より無く伏罪はおほひ呵くと笑て
止るおとろは奇病の奇效を尋るおとろは
首尾はまよりふく病おとろくも昏るおとろ
ハ割ハ卵中ハ牛裂衣の割たるく人意思を愉快

さぞおとろさて腹声を病と出来とるの議論を
ハ團扇をとりて毒悪の冥罰と諭され猶又烏許
国のるを糸とて同引国陸胎国愚夫愚婦
を誡めて迷津の筏とものおとろは漂る
幾言ハ例の深切其厚きを感佩してふへきなり
○路六ハ姓名ハいふとあるは素藤ハ現金より
るハ假字ハたふと元不時ハ業當と冬と同一くある
元盗とあるはさう盗田ハ母姓と有るおとろは猶その盗
田は盗田あるをいふはさうおとろは上総の
地名とある○素藤伏家の老賊を欺き有財を盡

あそび
あそび
あそび

腰より走りしに、奸智の深き信義の無き先づ出端
より其性其要とんせども、但し不意の山奥より
慌てて駭くも、かゝる奸謀即智あるべし、此の者あるに
一城主とも奈迹とへき、直ちに先んぢておれり。○
侶奈之の村名ぬ、但しその文面はまづけられ、名
もあらん。○幸ハ、金行長を奪つて逐電する序
用はあやうし、此回の標目うらやまより奇みん、早
てかくお奇く其段取いさる、一英雄の難を逃
び奈迹との道行して好漢思ふるくの脚るあるの
一も界、其實ハみふ、賊いき役者ハ一人も何と

讀むものゝ面白く、さう中ハ其一時愉快あるも
有るやう、大士ある、狼士傳まゝ、一奇編のそ
うとある、お人ハ自由の妙事なる。○赤坂
幸ハ出さう、秋川は赴つる、研仆ハ六百人を取
死體を川へ蹴込まふ、あゝとある、なれと素世膝
出山のまづ一花前は奸智ある、あゝとて、勇
又せとぬ、行果はあゝ、六百人、ハ幸ハ腹
は著る、さあ、例のころ、一日用錢とある、さ
無くかゝあつた、素世は賊情し又ころ、これハ
さうく、さあ、あゝ、幸ハと結果、ハ渡はハ

近きう遠きう近うんは柳川廣うも其殺伐
稍公聞し知へきう夜中といひる曲者と一句の間是も
也そ子細なく渡えくも其もれもさうハ渡けは遠
しとせんハ然而船を喚ひ渡を求めてとさうとて
ハ何とさるのたうさるやうに但し喚とあうハ船ハ向
の岸あふんうそれうても喚声のすんうもハ殺
伐しきこえうあうさるうしとさうもあう心
稍公睡りて殺伐ハとて喚とてさうハ眼をさる
船漕もて来てはせやふんうそれハ何の事ゆえし
と笑く○筑摩の温泉は遼道ハ何の用無き

やハたれと柳川うさうと又熊谷野のさうとハ越し
あうも其ハ又越えのあふるも有り五立目静然と詞
歌は慰みふとかの道行のゆうとて即文のゆうあり
此五立目あうとてハ四賊膽吹と諸逃ふて熊谷の瘡
寺はううは果をいて在るの越えもあうとてあれ湯治
の長遼道無用のさうハあうさる○熊谷野の危難
より瘡寺は願盆は遼道さる何の編もよく有ら
さるさるハなうさる勝色たれと賊さるの遼道ハお
やろく取まをさる洗濯上手たれハ色あうとた
緑の林言葉文句しとろくハおやうさる句論ぬ

○願益々お詰りと膽吹山寨の二路着前同三管領
の詮議をも弦々々々旋風二苛九々々て出々々願
益々詰るるるるハ素方々膽吹と出々時此二賊ハ
山寨に在たるんハ加こてハ出せるハ老賊人員多々
てハ素方々詮くハユ合あ々且此二賊ハ詮をくげそ
てく々々々ハくく加こてハ出てハ不々合○素藤
願益々喻さ大話即後回の伏線其論さる不正も
そあ々の豪邁の二雄論ハ賊々々を看とく前ハ
鎌倉へ赴ん々々の料簡此ハ小賊ハ結扭々々の
覺期無敵膽量さるる巨魁のさるハさるる同

大志胆量と悪又悪の自然を妙く昏分けぬる
くふさて此大話奥は乗して説諍る二賊の答もそと
いひつ吐と笑ふと有りたる此暗諱ハかゝる紙上は声
あゝ心地せりまゝなり此時いま酒無し此話のときふ
小賊々酒も肴も持出り文段の拍子且又前は準備
を命じり丁度料理出来時刻と例のくるくるとこ
ろもあるとされと此等話ハ姑且ての素面より酒盃
の人の奥は乗せりつても何もよくんうとおめれハ竊
はあふことハあふ人ともそつめりまゝい有へきや
あふハ此取取はせぬとてハ諍攻の又うけりや

○ 卧房に入るとゆひせき新智せきんさ
あふー座人賊巢は賊難と免る新奇新巧お
ろくお坊は假は素菰々花方の三役めき伴作莊介
う面新あきとくくて妙○ 苛九旋凡うろよ至うて
ゆきまろおろー此二紙ハ素菰ハ敵葉とあめ
膳吹の山寨のこあにおふくもろあよう居人るをてハ
何うよきてとくくはけりともてとてゆきまろ二紙ハ
始終素菰と面と今をきとせぬる配加減面わー
今宵ハ不痛と古く鳴きふ振起もおろー小賊ハ
空骨おと告ふと又おろー笠ハ眼をやき例の

則是後段
の伏線

るろく領くのふもあきりい有り二賊の苦き小紙の
不平時次條のうろあきりいさてとめ二紙の帰る
さるおやろきさくぬくさて此二紙素菰うきと
論破して殺して金を奪えんととろろと願ふととろ
むと願ふととて信義有るは似る苛九旋ハ又智
見あきり似る五賊を假は役やととて一役分けて
さるさつへきと幕とせぬるしおきあきとや
喚へといふ苛九命腕は換ふと木枕をぬ文句と
○ 素菰ゆひせきと果してとて其かひありさて
おまろは逐電ハ臆やと笑ふん要ととあれのこまハ

好評中不
物

大胆直氣勇まゝして愉快のまゝいふべきことを
人根性と昏き一八片言半句も欺奴等よハ筆誅を
ゆるされざる例の用心の繁華あへ一猶るまゝいふ
奇詠うゑと根ハ素直々不信薄情我思をかこ
てさうして人の思を怒うゑ是即ち人根性○二賊
を殺さんとして先づ酒を飲み刀の善悪を鑑み奪ふねと
ふ大胆の賊情悪人ハ善人を圖討せとす一立退く場
をまゐるも有るやれとそをせうく悪同士の如く
廻して又せうくおきうしておる一頭顱を遣
遣しうゑいふハ悪の遊戲とて此場の假の立役

小賊評
精妙
是則ち外の
評評并の文
阿比の中

精評

是とて悪方まゝいふ一小賊を研ぎてその善妙
小賊評手は記出するや見えなくも小賊をさう
くハ熊谷野老を釣索を膝に又奇詠々帰る時
そそ其そ告一者やう一呵○二刀の中をいふ
方こそそ刺へきやれよき方を腰にうてうて次
して刺るハるのゑるたうやういふハ九作あんな
次ハハるてよき方とて刺し血を拭ひ撫よそと
あんなきところをかく昏き一やうしておるし
二刀いふも微妙まで鋭刀とてあんなハ酔臥する兩人を
刺す用ハハる利ハあはれ且えより自らの刀もあり

店まで子店孫店甚多一地方を本諸才子書見
 堅より一接もいぬ入る女ふに既に 翁の
 ひう弓月二層より本傳ハ士の洋水相會ふ
 段取ハ殊にありよく道中此今も再會はともハ
 おゆしとあるとさハ層とて此知ハ素友願を
 の再會ハ層とておゆといふ深い水瀝ハとて
 自餘の編豪傑好漢山林嘯聚其本意ハ忠義
 もあれ其所行ハ人こそ是 翁の發明説百ハ人論
 あつとろされハ本傳大士ハかりよし此轍ハ踏され
 犬山軍用の為とてとるこそ猶自慙して書きた

うめろ暫し諸令不足たまりも穂北ハとて荒
 茅山指月院露とろ山塞の自具氣無くやれ
 いろとて水瀝の旧例を思と思とて換骨して
 こそ妙とつとれ其ハ取捨の妙其用心の深き寔
 こそつて感心なり

九十九回

強人ハ夜とて心おとて酒飯を喰ふ一矢く ○素
 藤錦八巻とて来り此地とて店小二言より上
 総と来りやれいろおすろハ作とんハ上総を層
 急きしてとハ事抱やとハ筑摩湯治城とて詞

精詳を
するなり
甘んじ

敵の人なりとの談話よりかこころ轉思して上総に来
るとあるある人運改より幸ふ幸ふつくはつと知
るるに素藤より上総の発迹意外ありてハぬあるに時代
鎌倉ハはもせよ管領勝元京師より次ての大府へ奈邊を
おふ者又世渡をてるるも誰れ其れこととさるるにせん
素藤御影寺駅より料簡又願ふ語るも鎌倉をさ
しつるある十か又鎌倉へと榮浦と引けりて一轉して
忽ち一日は上総へ入とれと讀るるもハさのみよ
ふしあるやうふふる曲折廻轉あるも巧思のめ
をあるふふし○素藤上総より一日二日を過して肚

情の
使の用心
なるなり

裏の思案をも要ありとてさるるも發迹さるるほよ
められハ已を知り人を計る奸智も又深きところ
且後段假善を為さる襪染欵○夷瀋長柄二郡
のそこむとハわらうと交記今しそめ其れ其跡もある
ある一但し普善村の雌樟樹ハ此如く實は昔はそ
今ハ枯失するなりハ今在上郷村の真実よりして
普善村のハ此編に假しまうけられあるもあるなり
真假いつれもあれ今無き方を看るる例の用心の
ところある○如満暗愚のともあるに不仁非道かく
のめく叛賊あるハ滅亡するもあるハ例の徴も要

時あらぬ疫癘の理論々々ハ解一か之ハ誠也是
又例の深切な事○玉面娘さて奇怪の物語を出来
しこれ初編流田五八房大を生育しはめてそのの
奇怪の用のみとせむ忘て有つた九編のころは
意外の怪名さて奇怪のおこるをあらわしお里見は
堪へき然ありとハはるん玉梓既ハ解脫して八房大
飯正やりするは執念を然あるハ何のともなくふりや
まとなぬ推量とやうせんより次編を研ぬその
拍掌感奇を知らるるよりめさるぬの怪里ハ南柯を
采谷山の木猪とハ事の黒いこととあらわしおハ

評一
筆の
妙

れと同一くハ何と外ハ案をあるとをきくをい
ころとよかめくと方を附るし補をハ塞くは
とハ癒ふかめよふハ是つてつてハ前方はあてハ
いふも又さる一かとは二番前して目的さるる
おやろき其效其方を賞へきなり○黄金水を
以て病患を救ひ黄金を以て貧乏を助くるの假善
漢国ハハあや有る妖人の民心を得るおふきと
ふくて妖ハ玉面娘ハ役分けを素女ハ假そふく
一時真のふきとふきと一変おふく一さてその
論せむ假善とさるるハ例の賢道寸の深きこと

絶例

る勢ありく猶うを讀みてハ出身邪惡えより
美知假善しをくろくもむしう何とぞ素友
うそのそよ留るるをとりみよのむいなり是又
即修せらる假善とてその忽地果報あるとてうま
して真善よむいてちやふと利は屍馬よあつて各
る華美とくしう假善の部類ふんは二哭く
○如満墓田の事をやて大に怒り遠親を喚てその
吩咐ふ事の勢がく見おも其意てつるやれハ
いふそをうのるやれと文のうて見る時ハ素友い
まゝ如満を刺しける言とありけり又民心を謀る端

但詳
精細

と顯るはさうとてのそハ都合せざるやれとこれ
文は前後あり又詳者もあるところいさふおはあつ
るうて文は素藤其る無きと鬼語の魂胆意中
の計較残らざるおのむやれハ必なるあるへハ文
外もあつてつるこ又一つハお素友をうと假善
中いさ其意あるさる人の善をうてハ媚みある小人
の癖やれハ告りしやれハ同一く役者編輯捕容易の暗
愚よりして禍をぬきさる如満を唇よりうとむ
とてそれよりけりあの方やスー○遠親憎く
地は村長は通して素藤を走らんとさるより素友

誘して如満を執るゝのまゝ遠親を撃て館山城を
奪ふ奸智邪謀時を得る段取りよくし及ぶ
るふくいさうしこつてそくさうくうてさう其
事勢まことや久くおろしく 公翁よあいて
るの段取眉顔一蹙即刻即業手間隙へへき
おもは根も種も及ぶふく水滸の面影あさ
るやハ前もいつまふなハかの中要中の勝るさ
つて自我は似ぬふぬへくハ又其意てんさ
あぬしそれふぬのるしあハ何しあぬ此小傳
既しいつ一奇編誰は是を讀は倦へきやと勝賢

千載をよめる
唐山の俗礼
天子と万歳爺
と新以下を
併せ千載と
いふ事解さ
細く凡作の
更對桂海と
る事

云ことことさうハ婦切のためと又例のぬり
そのさみの用心筆致齊一十載ハ至前守ふぬ
一等減一定まりの文例あへくふハよし何や
さるるふく猶やさるの取合やこし用心の筆
かと墓田茂迹ハ里見の及射や久く猶又奸邪一旦
時をゆるハ定包と射や久くあへき欣

百回

素藤館山の城を得て遠慮を迫らハ先づ里見は遠
猶其機を攪んとて三城主を謀説き偽忠をつとめて
里見は媚るの奸智の深きふとありく意を得とハ早

伏線をまき

るる驕怠りいくほとなく地味を出せる小人のさるやとよ
つちめと段取の自然おもふる。○義成四家先との
議論いふれぬうそく賢王智臣となく素藤が握
中より有り○素友里見は媚んとする所行はいくやう
も有べきと三城主を説きあて切とする例のるやうな
るるちやうる。里見は扇谷といくは太石うこく
利を以ては媚つてうそを文外よりやれおる素友はそ
く後日黨與するの伏線とせぬう素友館を
得てする隣郡の城主は好みを深くいせで一番は里見
は媚従いさうして三城主を説き已く利をいふ

素友の何ぞ
洋のう精の

伏線をまき

は連和の羽翼するもやとる時を知らず勢とるう大は
よりて小を吞軒智推謀の深きを看とく深くして
かやる。○房総の旧族を扶持して人々を塞くる
るは軒術を看まう中よりやく富山の懸危見の伏
線細妙とく○願益三賊を招きよする助悪の股肱
あやんとて此二人をいより其つらうは看まうするは
いともをまうし思心助名とくは愚直なる使を撰
其地方をも熟と諒て出さざる實用らうきざさ
はあて途は二賊は殺さるる虚用らうてさうして又
書翰と金は実用して二賊事の子細を知らるる曲折

素友の何ぞ
洋のう精の

妙なるものなりし愚助結果と書中ニ指揮ヤ事の湊
 巧なるものなるを羨望し強忍いとも憎む此と云ふことなり
 愚助熊谷の癡寺に到りて事なるをかく
 曲折して昏きハ此湊巧のちよとせしき一とふいと
 昏きんとするものなりし熊谷に到りて事なるハ彼
 れハ小賊あり二賊館山に來るハ小賊們を假まへくしは
 りて残しかきてハ小賊等ハ賊巢あするれは成るなり
 餘りうとそとみおしをれとそこハ例の精算ある前後
 首尾して不用のおハあるれハ妙筆あるハ此と云ふ
 曲折せしめて愚心助としあるれハ湊巧ちよと

書之可貴

ちりきふしは目よりぬく是等の間の狂言
 と巧を盡して居るや筆よりくくくきうと
 あめといふもさうぬ感心く○借りて返さん許へ
 請へんの黄金水の恩を責て非道の獄に繋ぐふと
 要物の心情を眉よりのみあつて假善の報これ
 こ帳消し却て真惡の一事よふまゝこれ緒
 算くるべきところ歟○朝顔夕顔の二妾るかそれと
 玉持の對ふふきうさて此二妾のため樟上の神水を
 ももむらぶらう柄板で一濡れあやうおろしく
 の神水其用ハ玉面嬢々奴語よゆくと神水ハ神

水あふりかゝるは假善といふも用ゆる事な
るハ驕奢の辟妄のため之朽抜て其用をあらは
文外の深意おあゝ神水もほしてて玉面漲
為さるゝと疑ふるゝふれとさていたるは里
の勧懲のゝはあゝゝゝ一妖おとゝと成り老
猪といふてハ天地の機もいひあふハ真の神方
をもくくすゝ前よりゝを脱しゝる金水とて
疫病を治する鬼詔の奇といふ〇昏るゝあゝ正
そ方あゝと昏るゝ例の精細なるゝ又素な
膽吹山より教ふるの金と集まる 軒智也といふの

精魂

孫策
孫策
孫策
孫策

細評佳妙

るぢれと其金即ちゝゝの用あゝいつゝゝゝ
二用三用ありゝゝゝ〇素藤城樓より
街衢を省て八百比丘尼の奇持を問聞き城内より
招くる孫策々干吉の表裏歟如満々妖を怒ると
素藤々奇を信すると對とゝゝぼとゝゝゝ
忌しき事ふゝ人のあゝゝゝ得手膝手ゝゝ
もてあゝゝ〇八百比丘尼ゝの出端寂莫道
人の出と對して善々悪々ゝゝゝ其衆やと
昏るゝ不〇個の仙姑のゝゝゝゝゝゝ
詐八百教の一句もちゝと臭々ゝゝ且衣お衣のき

らくしそも偏歴は施主とと解きてハあれとあり
 つく清真のてふもあつて寂実のてふハいふ
 者し今之をハおはえのひと善ハ善悪ハ悪うへま
 それと云やれひと出端より下は何となくそのま
 ひをそのれしめ文ハ感んて返覧の術と主と誇
 りて方士の術とて佛教はありとてさうみつた
 といふ教ありてせしる○八百比丘尼の論せ
 らる如きうそハ虚実さたよくきくあつて但し世
 はいふところ唯其書を子のこゝで称するも道德を
 いそがれといふへき怪異といふことあるを自注は

いさろしく、縹號のみをハ借りるゝふれと、妖尼の稱呼ハ、肝心の主たる書符號を借りてハ、本人をさるる迷惑あるんや。翁もさるハ會釈あるや、唯其出端の耳馴名ハ、借りておられると、してさるや、妖尼り自言りしこととさるや、事ニ決まおきてハ、妙椿の椿字おやろし。○朝貌々々、白々とおもとさるハ、二ハの佳人々、お返し魂術果ハ、奇やろふ。此肺色、但見の漢縹を倭錦ハ、絨々うめく。錦心縹に、絶好。○妖尼意外の美人を見せて、素藤ハ、焦心や、を問を待て、哄談を

近日圓洲
 新島徳本子
 狸久人作と
 同日の帝といふ
 徳本庄藏
 水として飲物の
 こといふに
 所構も亦人
 にはあれと
 さきのう
 るわに詳
 果ては
 なるべし

浮世草子
結文の

蛸竹交りて青蛇の舌初蓮翫て黄蜂の針
そろく紋紗の法衣を脱く段取文勢までい
く○傍る人々熟睡して喚へと首さして
時をうやむるをうは神仙のようあるゆゑ
故能心をはかりうるあやといふは又此の持まの
けり森入はあうぐうー呵

百一回

素縁外人を擇むをうは後巧は千代九乗をうを
頼みて婚を請ふ義成理倫して許さるるより
かゝく罵罵るを妙椿さめて邪謀をふとまで

浮世草子
結文の

別はうきふーはあうと其文段のよきとけり一而と
して空ふをうのめ文ハもよりうふもなりぬあり
年庚の不相應ハ素縁もあやむをうを妙椿の漏
動さふとよとあうといふさうめけとさうとさ
そうー○遊観をとりてハ義成謀えうに妙椿の
秘策さうめけ樟樹の虚のう三男匠のるなと
術ありとのいひて其端さういふと唯今め手段を
示し指けて飄然とさなる教深くおやうーと
は一旦さるるとさる暗に助けて妖をふと後段
再出現とのひつとさういふおやうーと猶後評は不

へきし○三社の神主後は用あり且きしあきし
 は祭祀はも人無くあはしうて其等の復任を程
 よきふのたふしきと看としる例の細事とさ
 きた○課るころハ義通の初甲と機會とて
 其多し詣をのみあはし詣ふころハ其る無く唯三
 社修葺より国主衆詣とていひて義成そこを教
 ひて義通初甲さきハこれを詣てえと諾ふ
 文面の曲折ありきハもとて奴元の御策あり
 かゝ人の肺肝をたふし如き奇を文外にふせよ
 して請ひなきが請へとのたまへ一言辭めし○義

通初甲の年月と大山太坂復讐の同年月とて
 九十七回より段々ころは合せてふせられこそ
 物語は此を人々定法のるなりと巧拙ありて
 合せよハおしだいどのふし○從駕の多きハ
 義通の初めよりあるおろけ義成の用心深し詭
 山はさよとて其日は詣て其日は退くふしゆに
 なきところをふくめられふへきかく用心深なる
 里見の貫月そのとて又そよ一旦おふふし謀り
 けりハ意を固く費月うつぬれり費月ころの
 其意は看みしうさたあきしハ知るふし其意

よつたれを頼も一はよまなやうに宗徒の誰は例ふら
ら皆うろくは佳名之路次の精細何れと例の筆
をきまれさういつたのるの威版之○貞行直元ゆ
つふく服猶産猶の出来たる前言あれのね様うな
わる事とハ知る事とそそハ其ふまゐいふふとも知
るよ一そ一奇怪とそ奇怪と地道の奇異ハ何やらの
小説子似たる者一うもあつたれと何やううと
おぼえそその似不似ハいふやんそ今そよ其奇怪も
あつたあつたれと意外はあつた奇異ぬし玉面娘は妖
術不測何の奇うなうらんふれと地道ハどうとて

ふら本事はあつたうとあつたつてハいふくねなり
○篤宗乗勝うたつ老岳とて三社の尖景とて
やあつ精細とてあつたう一大椿とては両士あや
ふそこの用心あつたうとてあつたう一讀む人そ
はあつた安ん次の難兵仕候は嗚呼と哭とては
らあつた不諺のゆひ大敵あつたあつたうとてあつ
つたまた○病ハ時とそつたうとてあつたの社系ハ
甲より請申しあつたうは依ハ凡寒と病卧のうとて
旅館へも出来らばそつたうとてあつたの社系ハあつ
来へきねををねとてあつたうとてあつたの社系ハあ

文外の神を
浮く
至

かへきさるゝをぬれらるゝて謀て除きしれ
るゝ文外の勝るゝとまゝのゝ○三社系は
田はこそ邪謀の種なり義通は初甲の祝祭
を従駕美とぬをきくハヤミとて正八幡
宮の糸詣は其祝祭の盛衰を見せかゝりて
休改は諏訪氏の神の路順とあれと
らるゝとこそあるゝ正八幡宮神馬奉納
祭儀のゝとて又過とほのするゝ後同神官
一番は稲村注進はちやんと用あるゝとて
なき猪ふゝ細なるゝとてあるゝと

細評好々

解評緒細
を
妙

いふも威風のゝるゝ○義通大権の奇を
ぬ貴介は本性百に中例のゝるゝとて
と一個の紙を研ゝるゝとて
此とるの奮撃実戦戦中の中なるゝハこと
へきふゝとて但ゝるゝは双方一言も罵
あゝるゝとて歌歌方言を出さるゝとい
るゝとてふゝとて○妙椿は篇は
妖物まであるゝと奇術ありて
又は仇とてとてかゝるゝとて
娘の娘字ゝとてあるゝとハハ九を
つ

新編前度相照
りて之を
しめしむ
此の事
ありし
なり

へふとあふいづ初編きりよちれてあふい怪あうこは
再あふんとは寔に意外の怪事とて腹稿の深遠
廣大なるを入て感服感心さてふとふあふい
里見は伏妖を臺田は妖椿雷果怪邪の討撃あふ
へきとあふいて妖妖を滅せと大江の花とあふい
中編のあふいとあふいとあふいとあふいとあふいと
られぬ奇巧な案そのまふいといふあふい初編安西
虚は伏妖を要んとて軍陣の事あふて後八房の
怪事あふい此の臺田は妖椿雷果を討撃て戦
闘のあふいとして前は妖椿の妖邪出来あふい

照對評一
りて之を
細

遙とおおいしてあふい事と異なりてあふいなるを
其怪其妖の遠く根あり因あふいとあふいはあふい奇絶
近く神水鬼語偶然とも自然ともあふい奇絶
さて樟樹下の玉面娘声のあふて形なき米谷山とて
いふあふいとあふいは木精の妖ありとてあふい
あふいあふいのあふい只素なう木精とてあふいとあふい
あふいのあふいとあふいは深妖の素なのみあふい怨
あふいあふいあふいは木精のたふいとあふいとあふい
あふいあふいあふいは南柯夢とてあふいとあふい
脚色の用とてあふいとあふいとあふいとあふいとあふい

百二回

葉門の先夫思慮ふとふささーくして例のころをなり
社頭の櫓を惶として死骸を瘞んと議るは村民臺面を
必として否とかくする所は猛可な凡るぢうて敵軍方
の死骸を吹遣うい鮮血を洗ひ清めたる見れども不意
の凡る奇めとありろー此時榊樹の洞より迹をく
ふもる神力もろんさやろる筆力もさふくぬあふ
くー正八幡宮の神主ハカチの馬を馳せ守出の
道は葉門は逢つ何とて例のあそひそくは伏牀の
神果示現を二人と見ゆまろ榊村よりて告るは

明洋精細

とつふふいつふふとろの段面さるおやろー
○神風里見方をのこ吹散ひてハ社頭は穢みろ
ふハとて臺面方めをく吹散ひてのころとて路
をさーとを路傍樹上の鳥首神助神罰灼然と
明妙詠ふぬ巧ふた又其奇を伏牀假現のいとめ
撰りやふといふぬおやろー○権化の小女めお
ふはあふもろんふろおやろー前は一乃の雲安座
の方よりまろんおはあふとまろ金さうぐて又葉門はハ
カチ行者のまろといふとて神女の霊験あるとてや
あふふろおやろー思ふ乗さハ益なきのころ屋は

天孫御降

遇ハハ城樓の辱實字の伏線又余數盡するハ同
陽の云となと神女不現と看ハカハ誰ハ看きたる大
くハカハ其言簡くハカハ意深くまゝハ
看くハカハ其言簡くハカハ意深くまゝハ
義通の厄ハ天命免とくハカハ神力甲斐無きハ似
ハカハ意深くまゝハカハ神助ハカハカハカハカハ
例旧式是又誰ハ看きたるハカハカハカハカハ
ハカハカハカハカハカハカハカハカハカハ
ハカハカハカハカハカハカハカハカハカハ
らんやハカハカハカハカハカハカハカハカハ

天孫御降

天孫御降

ちるハカハカハカハカハカハカハカハカハ
能九郎ハカハカハカハカハカハカハカハ
事みハカハカハカハカハカハカハカハカハ
駿ハカハカハカハカハカハカハカハカハ
もハカハカハカハカハカハカハカハカハ
天年大ハカハカハカハカハカハカハカハ
て雲駿ハカハカハカハカハカハカハカハ
箇月のハカハカハカハカハカハカハカハ
をハカハカハカハカハカハカハカハカハ
神女ハカハカハカハカハカハカハカハカハ
神女ハカハカハカハカハカハカハカハカハ

つ

義通は威力もよくと數十人死傷の伴當を吹
まわして忽ち地を蘇生せしむるの霊験ありこれ書さ
るの天數ゆきやう義通幼童よりあれと将種なり
殊に女編よみて金玉の公子と大川の水責大田
禁錮英雄百折千磨何と同一かじと評書の
邪謀を擒られ城接あつてさるの辱は伏蛇の威力
あつて事編中の二大恨もあつてそれ天命天教な
らば神佛とて私やぬ件をとおひてハ慰むべく
又さういふの普通の神佛の威力を験自由自在
さへといふ何事をも白雲紫雲でつとみてさう無

例の理評

味無差別とハ一つにはいふべし然れども
ハ幡大神ハ源家の尊神諏訪又名なる尊神とさ
るは昨今為神の振袖神種との霊験あつて此
歴々の親玉神を何の威力の事となくことと諏訪の
御神ハ地道の便利機會の場所御境内を所貸しある悪
勝善敗高見て見たまひ終の積も振袖の掃除改め
御自分かゝる清めぬものもなくそれのもあつて
の葎根妖魅の累なりと社に有あれは元より邪因
ありと但し素戔神職までハ假善ふくも村民は徳
あり又妖魅の勢やのそ害をふくもなすはるのハ

鬼神の役の
不可思議の
人の上に
神ありと
人の上に
神ありと
人の上に
神ありと

後を以て前を以てするものと其の間に邪おの妖おの
ゆ神ハ見通しあるや疫鬼ハ注連を結ばせし
清手降ありふくする邪お妖おを清勝えし
何んぞ夢田清ひいさめさつ又ハ村民誤りて邪
物ヲ奉仕するやまういとちやたひて早に何れ
へう飛きたる御社ハハまきさるよりいふもあれ
合点ゆきふくするのやうな是又天中天敷と
其天中天敷ハ高天原の神議とハ幡諏訪の尊神
をうけあつたたまふぬ一すれハ諏訪の御社ハ軒
偶然と會へきと軒お妖お時を以て今日至れ過

の此社前ハ山火厄はかよふとて天敷の神量と鎌倉
右府の鶴岡階前の宮おふ一ニ尊神とありて
たまふと神議と私ハたまふと私ハ偶會
根地道機會ハ敷のまふとたふしてさふより
枝葉といふ村民の假善の徳ハ生をいふも如満遠親
盈恵と邪謀ハ死やと敷やとふれハその眼
神カ甲ハ又無きやうなハ素と罰ハ時ハ
猶其邪惡時を得る敷中のうちたれハ敷ハ敷盡る
と待て罰ありといふとあるぬ一但ハ罰ハ時を
もたしと光と助るハ時をたしハ猶遠速とあり

後洋い又一段
の辨に史評の
抄をよみしに
いふなり

奇霊の神女より寛物なりて良佐の種とふりてこれ
天敷の神量り既其家を守護るの神女ことと尋常の
霊ありて實每天も極ましく成りかゝる人ハこれ
としてハ幡詠訪行者観音諸神諸佛を助
けこれハ合し令て種々の霊験ありて里見の家
を興やせしふとふハ神女の奇験威力諸神諸佛の奇
験といふ一ハ文外なるの深意ありて歎する人昨今振
袖神も神通廣大と云ふやとやと云ふやと云ふや
ふのと深意をうかひいふはまづまづて合てけ
いふと云ふるを云ふてよふく一ハこれハ言せたる

居ちしとてさうとてさういふもふふりていふと云ふ
こととなく婦切ハもかく一ハ初より云ふはよの人ハ
誰も知へざるものことと云ふと云ふて一ハことと云ふ
るハ老人のくうさうふハ思ふと云ふ又云ふてある
と云ふと云ふハ辭客の理屈上ハと云ふ似たりか
と云ふと云ふ文ありてハ外きていよくと云ふと云ふ除き
捨るやといひいふと云ふは燈下半夜の筆勢無き
人も惜まひてふきたなくと云ふては笑をとる
さうと云ふなり○貞行直元の降るる前より妙なり
所為といふと云ふと云ふといふて其怪の意外なるの

この反封
桂子と
口実

如神精細
上座の事
至る佳妙

奇妙と下知の妖昏二編せる行者の霊昏の反封な
らんハ愚筆を費せんとす前ハ此霊昏あり
の妖昏の其奇ハ意外の新奇と驚きおほふとあり
祓とねばる為とて人似とてとてとて下知状
妖昏あるとハ意外の奇怪意外の奇案とて驚き
ぬとあり○午時の怪風傷人人を吹落しとて
生して社頭の寝を告げ君臣上下驚訝をふとあり
の評議を凝らすとて又文ハ昏とてて氏元と西士
の物語を虚文とせられハねとて社頭のなるハ再文ふ
まハ凡作す筆拍子まねありハ此虚文のあり

きとありとて午時怪風ハ一大新奇とあり社の
のそれとて一段勅く又文ハ昏とてめとてきとて
かく惜しく虚とてハねとて又筆今とてハこと
新とてハとてとて虚とての間配りありの段とて
何んねとて感服とてハ事のつとて負行直元
来下刻時候歸着やと有り午時東門内ハ怪異ハ
して其人等とて医療手とて盡し更生とてを問注
所とてとて事の寝を聞て君臣驚訝ハ瀧田へ急
使館山へ情とて使評議を凝らすとて有とてやとて
二時ありとて大夫臣とて氏元一旦家へ歸り居

や程と云も後條は評議の席へといさく出て
行くと有り氏えの大光なりへは精筆の後見あるふ
もハ迂濶は評席中なりてた休息はゆんや同中人
とくとゆめへさく前條直元邸宅の不足狐狸の所為
歟と陳さる氏元憶を嘆息して約莫今案の奇
異瑰怪ハ只その一條のさうに和郎さく蔵人さく詞
いま詠らぬは自行く来さうたさき今のおいさく
その一條のさうぬ又の奇怪といつても詠らぬへき詠
不へ自行をさるや加へ下知状の事案指又一怪是は我
も郎王のおん人さくの言をあるやそこは氏え然るおん

目今我見は示さんと云ひおこさくとの又の大怪異
と二人は詠らぬさうたさき此段反誰々膝下へを
乃さへま實は奴段奴えさうさうの只その一條
のさうはも十二行さうさ亭午と詠らぬは程も
知らぬさうあると只のさうはを讀むはとハわの
大奇事と云えさうて今さうさうは氏えさお信は出
んとハさう外のさうめえさういさうとさうつくへき
そのおさうに何なりんとさう讀むはあやまる
文の間解りぬたぬハさうさうことくくぬさう
さうれ又ぬおぬひさうさうさう直えハ帰さうて

妻のきくはな驚くわうやうと父も訝をさすあれ
妻よ談の間へあじう負行ハ妻のきくの怪しき
よつきてハ狂ふ長くもあれ短くもあれ妻よと言語無
くハあじさる時はハ停年の大奇事殊に二郎五郎
大當りてああとはハおそきもの午時より未の下刻
と二時ごろとはハおそくと城内外も風況あるなりそを
負行ハ妻ゆづりてハあじきえ良人は語りてやん
するは負行杉金さま来る直えともハ氏えよう
めてはーはいよそと穿つ人又あらもやせんこれ一
まゝ現あるは似て細論のやしもあれと只小理のみ

うもて段取文勢をゆるぎあへ城内外は凡てあつて
 御書事よりゆくまでなく路地のほどよし又よくし
 二人よくあひあはれあはれあはれあはれあはれあはれ
 及てぬこさへは虚二頭の妙文を何よりてうらやま
 んぬ文のためは、大それたの評議をさへ中へさへ
 するの理をさへおとせんや、おとせんや、おとせんや、
 さういへく、吹あけり人の降る、城内へ出で、士卒
 せぬ、おとせんや、おとせんや、おとせんや、おとせんや、
 おとせんや、おとせんや、おとせんや、おとせんや、
 ん、おとせんや、おとせんや、おとせんや、おとせんや、

さくかろく評まゝこれハ樂を笑ひの魔障といふ
へとて前よりいふく氏えう直元は物語んとさうあへ
負行来るのぬ段取おのゝまのさうなるは皆怪しき果
るハ歸るのさうはえあつてさて鯉内へ奉まをお
來それよりていふさうのさうハ直元告げ負
行ハ令息よと言を有きてかの奉旨の素指よりさう
奇怪のさう鯉内も妖なり歟是よりさう郎更のあんじ
さうやふいふさうのさうのさうなる旨きさうさ
も及さうも二人の言をさうて歸者相違は驚く
不覺何れもさうさう父はさうへくさう直元

よりさうさうハ直元いさうさう負行ハ再いさ
さう令息よと有るさうさう此時負行ハ緩語再
言いさうさう有るさうさう令息よ奉旨の素
指の言を二人はさうのさうさうさう奉旨の言
えあつて負行ハさう有るさうさう又郎更をさうさ
さう此時は直元も同いさういさうさうハ負行い
さうさう二名の股肱の貫目ハ猶又氏えの物語は二人
駭然後悔歎息して負行貌を更め氏えは對ひて
さうさうて直元某も同意賞期さう又いさう股
肱先輩目もさう直元父の前へ先輩をさうさ

知評至き
至物

則見作志の
省筆

きおのさう昔言さくしあぬ又氏えうおろ
是又再諸ハヤれさておの口そのはのみあそと既
ついで直えは諸うもんととる諸執ハ貞行をす
之丁な二人おろるふ二人く、諸人まといはる
かれハ二人先へまといへて去るておのぬこあ
と虚実之間配し文段改まるのやうきそくしあ
くとふれと何ゆやぬと風心威服○貞行ハ憲断を
後さうて慈は身を教ふハそ又氏えう賞罰ハ君
はあう民さるもの罪あうとてそそ事より時
よりよく一際しつあへきやうのとあうよあいての

至高たハもろんよとてよとて意味深
やうとあういおへきたいのりそとあう
○十三里の遠きより百廿十人の手あつたと吹かて来
まろ富山の神凡はよゆるそれとあうハ既とい
狹青征西傳やんハ女子の法術とて数千人と陣營
とも山上一つまといふとあうとあうとあう
てそとあうをそとあうとあうとあうとあう
筆は目きほとあうとあうとあうとあうとあう
ととと遠い大江を助ける神隠しはそとあうとあう
おろれそとあうとあうとあうとあうとあう

又目より一大奇事さて篤家より一粒探の忠
 勇士賊犯よりやてハスよとえききのみあつた勸
 懲り又さるるけあらんうされと社頭の大要は皆殺
 あつてハ不都合と一旦殺して又生と神凡靈験奇
 ぬこ一粒探のまきあふれ難兵二百餘千人人ね
 大々難生して夏田方の賊兵ハさるる並ふ
 皇首やう是余教の編なるあふ実助實
 とつやれくこの楽療そめ二十余人れ又中
 教とさるれくこの勸懲よりこの難生の
 うちをさへきあふれ難るめつきのふすあれと余條

用きき小粒探とせと看きてはひきとく又さるる
 しくはあふれくこの安を看きさるるハさるる
 いさねお人難生ハされと氣力本復ハ皇能さるる
 三人ハ呼吸のかよふとさるるさるるえきき勇士
 難生ハ自ゆさるるさるる一大新奇の神凡靈果
 難生不難生品ありてハ賞忠とえききぬ又さるる
 こころて難生ハ一日と氣力本復一人ハ自ゆさるる
 あふれとさるるさるるさるる三人ハ後さるる
 ちうのと次條逸時高宗乗勝子分等とさるる
 忠勇を嗣やるとハさるる三人ハ是さるるさるる

隠居とありてもあんな瘠人ともな^らず甦生して甦生系
 あつたまゝと又子孫はあつた副勇あれも本後やまゝ
 て本後やまゝに^いるあつたの化界ぬあつたや^らは瘠人
 もあつた今あつた後嗣はゆつて皇居孝文天皇
 奇蹟をい^ふ甦生の甲斐は有り^とふ^へト○晡時正八幡
 宮の神主・夜子比乃城門を敲きて葉門并佐の神主
 おひ^く注進の時刻^く凡声直訴のちあ^まく^く三
 家老の云と疑慮義成の云と大度い^ふと^もな^らず
 ふうと^もな^らず^く條理明^く叔見物^ハ知^らぬ^いてあ^つた墓
 田をそ^の氏え^る物語は景能們混乱を怨大^きと^も不^認し

まで評議しそ未だきて正八幡の神主の告よそれと
 知れども凡声なれいと狂きためそ景門宇佐の神主を委
 細の訴言まてやうやくは定まりたる見物さてく御免なり
 よくもあつきゆくと引けてもかゝり拙くふ夫文熟筆
 感心し但一言奎田う正ありぬハ義成主従えより知るりと
 く濱路非のるもあり景能のちそ告るよよそれと
 ハ知れ遠きなるとくれん念のいつたるハそとあるに合
 いらんとあふふ人あふふき狂眼とてあてふへきし合を
 いれたるハ墓田不墓田とびせたりしハあに征伐を交
 せたりしハ墓田諸宮詣る社頭は伏兵ありての

乱たし景能們甦生の告をくとも墓田を所爲とて
誰もおもんまりて天武の明三家先の智を以て
久みきやふも征伐の大事にやうて情を使ひて
実を擇り注進分明は征伐を定む但し兵ハ神速を
貴ふとてふるもあらずなりハ又時宜しきも入きなりと
せらね所ハ里見家の出征軍事正大なるかの定正々
前後の思慮なく事も定めぬ出馬して大敗はなひ
と表裏のやうなむおもひなり——是等なるの人の論
たぬく川流してはく墓田と定まるも三神主の
かひく注進凡声直訴相累ふとてそひく用

有りていふも注進その甲斐あり段取りといふへ
○聖朝撃漏るる雑兵かつ本での告訴を神凡の
合紋例のるう——並樹の梟首神女の示現あり再
考するも靈驗いよく深くも見えたりようて三神
主疑をけて免さるる例ふく何一つ首尾せざる事と
なきをかりかの梟首を西三級雑兵の持来するも
よき證據のおかりと葉門們も其意も著^{ツカ}じ又持来
らんも不似合し雑兵ハ陳謝のためにも必おさるるへ
るものなるかむろ——又三老臣義成とてしるめ
葉門們も若くそ黒をそのもるも時墓田々幻術あり

又かきしめ

うと疑ひく見物こそあ曲を知りあれは方までゆきと
らんよ皆奇怪の事なりて昔ハ豊田ノ領地の神主
疑とててハあめぬことなりさて雑色ハ再度の昔ハ
疑とてて冥助と快とててハあつり別ハ奇怪
奇巧ハあつり其段取ことく皆きくくと合
さるるハあつりてさう文のふハさうくと何のふ
なまふハあハ老文藝筆のめあつりさうく凡作あつ
あつりハ只順てはあつりてを記すまであつりと
殆急上座ニ夫首尾丁寧平この段ハ妙味あつ二其ハ威
心威服なり○伏姫の冥助はあつりてと氏えいさセ

古語といふも
克念往亦亦
至聖まふ
至成名賢君
をやあつり
る理實通
和漢ふこの素
多ハ何ハ大儒
先生ハ限ハ

義成ハ我ハ亦忘る思へともさうと高論といえさるる
そふあつりいせりるハ義成の論さき大儒先生と
いひつハ一猶躬方ハ祥瑞あハ敵ハ亦奇事なりと
る文面ハ賞言の如く二代の良將ぬくハさういさ
うふ番あり前ハ女女葉門ハ示さハ安房の富山ハ迹
垂在ハ神女の冥駿とハり葉門ハ許稟のころ
ハ其言ハあつり神の示現の箇様とて顛末遺を
く許稟ハハ富山ハ言さるるハ稟けんハハさう
んぬハハハ氏えいさ思ひ合さるるとさう
伏姫冥助ハさうを冥助ハハハとハ他ハ神こそ

師まゝいふといひ又義成も妖上の神霊なる歟或ハ當
 家とせしめたる也一神歟とおめく言は浮きあそ
 び一其のあそびやうにエうふく此とていふや
 まは又歟といふ浮きてハ高誇のためは不都合
 ありといふけても皆どいふんといさるるを擧げ
 うそといふはゆめありにやらの少女ヲ示現の本神かん
 一の靈驗を義成氏え今かりとらとやうぬくあそ
 びといふ言のそよあそびといふ一矢く○館山征
 伐よりぞろ三城の動靜を擧げせきとるより負
 行直元は命いて搜本を攻さるる用心軍配手厚き妙

のみんあつて
 こゝに上つた
 ハハハ方と聞
 わるゝ是れ東
 の暴虐高き以
 二升以千と云民
 の不幸なる也幸
 四万泰の家情の
 爲に成す理れし
 とくして

之凡作ある館山の征伐はさういふられて必ともめけて
 三城を後よりてく昏る人をして先づ一番は羽翼を陰
 く軍配さうさき筆の妙さうとてハ威心し又貞行直え
 の貫目とせしめしやううー猶中帳にそ全評とふへー
 ○素藤うの並樹の四下ある莊客を皆搦捕りて陳謝を
 二文とせしめ皆死刑を行ひて素友は暴悪残酷とて
 首くさるの故に城門の軍民さうハ隙をうかつた
 いうも事ハかゝる例のつゝのさうを猪細筆と
 いひつゝ只ふもんあるハ莊客們人の不為であらう
 神女の靈驗めいゝふまにあぢふ鼻首の場下はせう

して勢ひもつぬ抑々横死の冤鬼富山はいつて恨
 とて依怙心だことなりはいつてふんちだのそあ
 こふべきとおつて素友を梟首のふとふきこく
 怒つて莊客と捕へて死刑に行ひこころといふめ
 素友より暴悪強烈人心の難也そむくをふせられ
 それのこころを如修して冥罰の梟首に懸捨て昏
 捨てふてこころのひそむめあつて精細筆と
 いひつへー○義成負行直えを出仕せめその只
 士を撫るの寛仁のこあつて其推こころ皆明あり云
 徳う趙雲の抱へ阿斗を抛くるとハ二尊上とておはる

精評

是則五對
るる上との
筆ハ

又二士は罪過の沙汰は及たさといひ、滅人々妻の親族
 們は宥免といひ、今番の功を以て恥辱を雪めよとを
 親族們的うふよりけりやうとて言辭の婉曲せる重
 臣を恥しめざる穩當感心せざるべし。○出陣 鈴木
 復讐言と同日とせられしは前は同月とせられしより
 をしかくして物語の経緯を合せられしより別より細
 の有るはありし。○景能をよこして荒川よりて瀧田への
 副使さうとてハ行そきしる精細なるべし。○兵庫助より
 来ると本賞より當城は止宿をせしよりて次は両士を
 傳ゆるをて城をちりせるとあるは両士城中は在るべきを

奇蹟なり
永く語り
傳へるべき
事なり

もろろ人のるやうきれ但し雨士ともなはる止宿
まては及ぬれ或は送番止宿あるれゆえこと
よれ旋あるれれ旋例の猪細やとてふふふふ
と何とやんまきとて止宿の二字も何とふくぬ
ふらぬやうのむねもあうかくいふものさうおもてハ
あうふとむのまきれのまきれとてふふふふ
へー○負行直えをさる館山の先陣後陣と
又榎本へううと曲折もあうろ二士意中ハさあ
れと一議は及ぬと言ふ一良士の真意かくと
そと感やれてあうろ一格別のさうふらぬやうの

ところと猪意細筆感心と○城樓の一挫妙椿
々邪謀素敵の計あう如く里見は恥辱無きハ
あうと是とてさる義通さる教の厄をも思まを
ふとさるんと前さるや神女の言はさるやかふて邪
謀の計渠の自力も成り得し挫もあうやうと
恥辱もかゝく思ふとあり○義成怒て兵を進め
義通を我手は射んとさるた右の諫を用ひとて梟
雄を主とあうとさる庸恥明主の義成とて憤怒がら
てハ有へうとていふ病癰憤怒ははる父子の情とも
あうとさる梟主といふはさるへきやとて諫言もあう

如く家の瑕疵をみよふありける女の主母なり此場より
乃ひ醜を出して刃を鈍らせ或ハ諫を言ふといふ退き
いそぐ類とハ雲壤猶其有失ハ次の圓ハ面色を赤く
快く辰相を遠き者一そくも又せられしを
憤怒の中より父の一言を重し己を遠しし
ちとて義成の義成しるころをいやくもよく
唇といふふ弓もたを撻とハ無く拂ふとあふ
定正守如と鞭を撻よの賢愚又討ててめい
威んく○辰相ハ馳来くそ諫て義成の言をまに
馬ハ鞭して退くもあふし
於るはあふ

昔は金吾のとき
全無金吾のとき
なり

まゝのあつたところも又月をぬやうに平文句は唇
ふさるゆゑにふらん筆を成し得へきうさくも
感心感服

百三回

伏兵の勝利奇といふもあつた城楼の二挫時とつた
此二捷の報あつせし義成の弓を轉して辰相の箭を
素夜を射せしめたるなり此伏兵の計策は辰相の
へきと辰相の諫のあつた猛可より前門へまゝ急ぐは是の計
策を談さき間有へくも無しよつて計策は逆時よさ
せられしと良干を報るは辰相合はぬ點頭のこ

といふ顔あつた點頭をぬくさき素夜を射るよつて辰
相はよく辰相をうめたるなり○曾平辛良井進
軍の討もいふなり○義成遠く辰相を召て
そこ前もいふなりかくあへきところ猪奴も
唇をいふなり辰相の答の條に忠あり智あり礼
あり理あり感あり○義成そこを感しよつた
そこもまた孝順敵智君の臣かくてこそ是の地
廣く平治はそめたり○辰相の一時の権多そを
義成ももつたなりと極言して父の意を推
し置るのきくなり周談中へ照文を来著しといふも

それら虚はあつて實は符合の文章をつゞる段取
の奇ぬきも、**段取**のうのみあつて其まゝもろくは深
ぬき○漢楚のるゝあつて引出つへさるぢうし
たゝゝも小同大異の義實う言のめく高祖はまぢひ
かゝゝゝ義成は難いハもろくは各くも張義の場
やゝゝゝ義成血氣の若大将憤怒は一時あやまつて
進むもろくは辰相諫は元来賢主とてまゝも威怯して
退くともろくはやゝゝゝとゝの義成ハさあつて只は
憤怒の進はあつて既に言ひつゝめ辰相は千萬言
諫とて一歩も退くまゝも、**勢**ゝゝの勢はさふい

そゝハ義成の義成ゝゝとゝろぢゝハ辰相馬前は諫め
を聞入てめぢゝゝも聞入てめぢゝゝ辰相もまゝ
其勢をゆるゝ馬前は三利を辭き言長く諫
てハめぢゝゝ各はくゝゝゝゝゝゝを權謀一
轉して父君の内命一を借り義成の言をまゝハ馬
牽旋るゝ鞭撻とまろめて幕と引き引き諫ひ
理言感悟の智言と跡幕は又せられゝハ巧を如
思ひゝゝゝゝめぢゝゝ○實の字謎ぢゝゝゝ
但し我をせゝゝゝゝハ只は實意を移ゝゝゝは諭ゝゝ
きとゝろゝゝ隠語は自悟をまゝ時ゝゝゝゝゝゝゝ

ちるをいふに味くさうして義客の
 おくふもいふに義成の悟智をいふこととの
 あやの巧はかろふあへり或はまた義客既に退隱
 して國事を立てて義成はゆつて事をきこむやと助言
 してむゝ二人の事あやの孫とをいふはよのゆゑにもあ
 るに賢く良主の退隱せむ大さかちやむのやうし
 えて義客は一向に隱居してゐるはむいふことも
 さうもあつたといふもかゝるもてむろんてくとも
 あつたへしてゐる父言はうて義成前は伏虎のふ
 ねあるとてこゝに信用せむしを臨むむの言もある

笑もまゝうゝと神託を義成はとよかくし今一きと思
 さまりしやうをうらみうは鬼神を信ぜし
 るの英明智見を昏きてるハとせんと又そのるも
 よう（き）れこの悔あふよくくく○ある時ハ又義通を
 城樓に吊登してそとへこれハ元來の本謀の前は屏
 を破るゝ一時の計ハあるハ時くかくしそとせし
 諸軍前ハこれまたたけむ今ハ又これを攻め攻
 蒐んと関くるを又其時くあるとさもある
 ありうゝ義勝いゝある奇計し敵はよるべきを
 いま長日銷すゝの懣くくも里見の必勝ハ大

うりかゝるんやをこそ看とてゐるは素素孫の兵法を知
らざる愚もつよくいそもんよあつよく看とて筆ふ
る——○義實おぢひひて大士をぢひひと微迎
つゝもそゝれやう伏所の冥助を祈うと大山寺系
詣をおぢひひと段取せ——老侯滝田は在て
勝敗をあやふとるかゝるやそんは自然に念も
あへきことううとてさうとこれさうと大士招きも
て至りそれやうて義成を幫助義通を極めの神
使やう大江う出現ちききの禊瀧はあはといふく
奇なりこ○余後ハ義成を幫助んともせられとて

明洋

そこなとみ意ハ義成までいおひるうハ義實まで趣
ふくやう——然又そよ義實ハ兵卒の再生
賊徒の梟首を猜して伏所の冥助とあつたさふハ
實字のそともとて智将の慮は出まこと自然に
示現も合つたといふと思ひ得て去る照文はつゝ
あ——義成ハ神託奇特と感ぜるはあつた
そこよそとて論とてそ奇よ惑ひ憑みて
怠るま——の意ありさふハ奇特を見聞——富家と
やう神助やう杖上の冥助とて感しおぢひとあり
ふう其社甚莫主へ幣を献——眞と為——猶も幫助

を祈るの所行無一父子教果やよと漫又信する
 ありに漫は無みきよありおのゝそれありと
 ひあむおのゝくも昏うくふ義成正の事は當り
 又照文より父意を聞きそよ神と親よ教誨は
 伏しそ是良おの虚心のところ神助も時の至る
 ところ伏せハ正神真霊ことよ我家のるやれも眞
 不眞よよるにそよとふおのつ信とふ信は
 其威靈應不應もあるおあんな義成感伏義成
 登之山は神使出現段取系めお脚色ハよとあり
 けれも又自然なれらの浮動もある何れもやよと可

ぬくし○富山の山河伏妖々自殺の後水十倍と橋を
 築し其用無く樵夫牧童登り得ぬる二編後其
 るつこも有しやうもあはるるこもあはるる
 やう伏妖自殺の其段は樵牧登山をゆるにあり
 伏妖しきと樵牧たつきとよろふ言をも有るやう
 おほやうふかしこもあはるるこもあはるる
 水十倍するふやうふかしこもあはるるこもあはるる
 此山の山岳に数人を藏せし仙窟に人跡絶て
 ハ不怒人の猶河水の常ありしやうふかしこもあはるる
 詣つるもふかしこもあはるる又毎年の法事代辨観音堂

ふとみえ人脚をきき山とありてハ仙境幽冥は不取
合こととみえ河水の猛可ハ涸て美実を山一犬江
出現抜縁の時来とる奇異はさうありての必用ハ
かゝりて此河水十倍をておろしハありて住僧の
此奇を告る義実今日まで来とるなりハ其意中
ハ徹せとんハありてとるを只そハ幸ひ民の便宜ハふ
とぬハふとやとらん国主ハありて人の言ふれとさ
さうらふとるそのささるのて同冬して出門ハ及ハ照文
等ハ富山を越山を越て今までありてありハありて用
心ありとふぬ○照文をててて留たハ無恥ありと

して教あり三人の中を教又ててて喊しとるれも又
おやろハ伏妖の亡魂とてハ詞の人とハハと義
実の亡女を思ふ事と驚くして前條のききもうち
合ひさふと又改條の伏縁もささるなり○
手向の水ハ馬柄抄ハかハくふ教人のやとれとて時
外ハ器無ハ近村まで花とてとて手桶をともいへき
やハ馬柄抄馬の用ハありと山野の騎行目正を以て
飲水の用とてとて又常のささるハ手向のあり何
ある時とて馬柄抄ハありて教ありとてふハ
○但見を和らけて例の一家の和漢のぬ文賞を人

榮鶴鶴の字をえつてなり
一名はれも又此間よりいふは漢名をいふ當
もろ本字家より求るなりたよ 翁は同ふ卓
道かきよて示教とあふく同ふく又よかくいふ
いと鳴きまじりハカこく憚あふ例の要癪を
る黙りてたまりあふハハ一矢よりいふ秋を胡
支花天竺花實ををまといてそふ用ねとよ正しく
あめとあふ色音のそのあふハ字のたふんかより
やるあふそわふたふハ本感といふんハ一矢
とと

く威まゝ一奇絶と榮鶴鶴の字をえつてなり
一名はれも又此間よりいふは漢名をいふ當
もろ本字家より求るなりたよ 翁は同ふ卓
道かきよて示教とあふく同ふく又よかくいふ
いと鳴きまじりハカこく憚あふ例の要癪を
る黙りてたまりあふハハ一矢よりいふ秋を胡
支花天竺花實ををまといてそふ用ねとよ正しく
あめとあふ色音のそのあふハ字のたふんかより
やるあふそわふたふハ本感といふんハ一矢
とと

○大樟の枝は見えおろそ承むなりとそれ

さう今より驚ろとまゝあふその樹間の猿前不
意の大驚但しそは何るあふと老候ももるあふ
へあふハそハう安意さふと二士の接ふあふの
腦危見こくいふとあふみおあふ又ハ樹後の大
音声まろ名をのうて出た其おおのいさうさ
待よ待ろ大にう出現榮あり甲斐あり拍あり
寒風皮膚も戦栗せりと春陽梅の花背や
そも奇奴愉快の出張なりふその英面をもちよと
又せてまろ今半ハ是まろの一葉やも又奇奴や
○竹捨のる礼服のる又馬の名のるやと事と後

の伏線やうに中帳をえりて、人こそあふれさるゝとて、八景
もつゝと豊さるゝを、作意の深め、**○**義実と
は再富山を山さき、のぞきふの射照たるも、うん
ちれハ事と正射反射とあけり、きうあるとあり、**狩**
段ハ中帳よりふやれ、うゝて、いひつゝ、中帳
より、うゝへき、さて前も、いゝと、みづ、九十七面房、終め、それ
より、此百三回まで、大や、く、いゝと、とて、皆大江出現の
段、取とて、無類奇絶の大觀、漆中帳、伏蛇、神靈の
大江、上、誇、其言、孰、は、疎、ハ、無き、お、う、休、ハ、特、は、
命、とて、休、さ、るゝ、と、い、ふ、うゝ、翁、も、又、さ、るゝ、ん、

大江、特、は、早く、うゝ、孤、と、さ、り、曰、一、孤、や、と、信、乃、壯
今、毛、野、們、ハ、幼、うゝ、英、ハ、雄、ハ、助、無、く、と、も、老、ふ、うゝ、
大江、ハ、出身、や、と、あ、て、飛、九、石、と、て、ほと、く、飛、さ、るゝ、
さい、ふ、ま、るゝ、の、幼、弱、く、と、て、大、勇、士、と、て、さ、るゝ、の、て、
結局、前、の、一、元、は、出、さ、るゝ、ん、の、腹、さ、るゝ、案、さ、るゝ、ハ、
こと、あ、ぬ、や、と、特、は、意、思、と、つ、く、さ、るゝ、の、た、め、
か、ろ、の、大、觀、漆、伏、蛇、の、勝、下、は、さ、るゝ、て、宝、刀、錦、衣、着、
顧、深、き、と、さ、るゝ、い、つ、れ、は、浅、深、あ、るゝ、うゝ、ち、か、み、
い、そ、ん、大江、ハ、出身、在、弱、幼、稚、の、尋、常、男、さ、るゝ、よ、い、て、
娘、の、梅、檀、卯、の、意、鳳、の、さ、るゝ、無、き、と、い、ふ、と、あ、るゝ、

人もあるところ 翁の深教あるところ 八行
いふと云ふと仁と云ふと其徳よく本編でも論あ
り其徳よく云ふところ 以て容易なりと云ふ君
主たる身もあるところ 本編の里見父子仁君
と稱して辱へるにハ士ハ英雄才も其身従
臣仁の徳ハ昏より一昏ハ自盡又臣の方より
て勇士の本色より一昏より一昏より七勇士出身
よりその花ある勇士ハ昏も一昏より一昏より
無智無行の四軍の大ハ仁字をまづ配るること
其父の身を殺して仁を倣ふところの徳と云ふこと

仁字の配當も一と云ふ深教あるところ 猶親兵衛
仁字の行ハ中快以後ハ昏も一昏より一昏より結局の上
より一と云ふ一と云ふ房ハ孝義忠勇七勇士より一
必そ其身靈玉たる徳ありて大士の一人たるべきこと
いふやん其祖朴平忠志よりの徳なり主を射る
の罪障ありそのまゝと云ふ大士と云ふことより一と云ふ大の
功を助け身を殺して仁を倣ふ罪とあることより一と云ふ
其子と云ふ大士と云ふことより一と云ふ大の
ことなりと云ふ徳なりと云ふことより一と云ふ大の
親兵衛ハ出身の花より一と云ふ七士の出身より一と云ふ

如神
まろめ
まろめ
まろめ

俊一威一あやそ今そ威風凛々たる出現ハ奇
あまやめやそややまみの間もさう又さびくハ
やまそそそやめこは七士門の思えやも一尋も
さふふて見おふに怪いふくと中へ眼あは在るよ
そもゆくみふくやめやめ待くさやそ前もいつ
あ段あふそあふは現れて怒るやその一尋ハ腹稿久
業格別ハ深く巧思をさふふくあ奇あめ威服と
いふもあまめめ巧なるふさてめあめいふくさふ
かまくと唇ハ並ふことこを未前よりあまそあふ
今あゆと中編とを讀あふりてかくやとあふハまこと

あろくあめいゆるんあろん諸君のめ評ハあろく
そらよ及ひてあふそそさかろあ唇へきなるのと
えよう有智無智三十里とあんかろくともあふさる
いさてやまんやいふくかくハ長くもあふくくあ大
江るのめあふさふてあふの思評ハことよくとく
長やうそさくもあふのさふめ多うりようて再考
今か一のあふさふしあふハ約て唇あふさふやと
あふふさふとほとふりさふハ又もふりやんそと
ふり甲斐あふさふと再考さふとと五十歩百歩
いつの踏知ハさふめさふさふさふさふさふさふさふ

たやさふおもひいふはおもろくはとさう
うそて居るものいと恥しく悔しくあん
さうと今さうは居まきうしておもひ又さう
おもひいふうきいひつくろんはふふうき
たふきうきふれはおもひうきうきうき
うきうきうきうきうきうきうきうき
てハ軽とくふとさうさうさうさうさう
椿説の椿の字ははとやん常あふ奇のまふ
あふうきおもひてさうさうさうさうさう
其まふさうさう又さうあふにさうさうは示教

乳さくさうさう

妙椿ハ玉面娘——ハ初編あるの狸あふ
とハ此編奏研一さうさうさうさうさう
つらさて其狸う里見は恋ていうさうさう
さうさうとさうさういふさうさうさう
さきハあふと腹稿の神機をさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさう
さうさうさう
さうさうさう

八犬傳第九輯上快傑孫評卷

の犬牙云々の犬、即親善衛之、此れ、親兵衛、抹首、鼻、口、
 味、毫、毛、も、な、し、又、中、候、の、扉、ハ、木、魚、の、古、物、を、入、れ、い、ま、さ、せ、ま、
 け、を、用、ひ、の、と、し、狗、兎、の、あ、ら、い、な、し、狗、兎、佛、性、の、義、を、
 ね、い、木、魚、の、を、さ、し、朱、と、墨、を、し、磨、り、元、を、ね、原、本、の、な、ま、を、
 ろ、ん、板、元、の、ゆ、つ、へ、ん、画、を、さ、し、う、る、ん、あ、ぬ、を、さ、し、を、ね、
 古、物、の、真、面、目、を、失、ひ、あ、ん、か、の、扉、を、い、ま、め、ん、文、丹、の、を、い、つ、を、さ、し、
 毎、年、毎、年、の、う、る、れ、の、作、を、毎、う、う、の、を、う、う、う、う、
 へ、も、あ、し、を、兼、し、一、の、英、才、の、も、思、ひ、う、う、及、れ、を、
 ま、く、已、ろ、ん、佛、を、い、く、憎、む、あ、ま、れ、傷、若、人、過、さ、る、
 批、評、ハ、玉、に、無、あ、る、と、し、う、う、う、う、と、わ、さ、か、ん

第九十八回の評 第二則 さ、 路、の、姓、名、ハ、い、ま、ま、を、し、る、素、甘、藤、ハ、
 現、ん、ま、う、う、それ、の、假、字、ハ、う、と、元、不、時、の、葉、當、與、冬、と、同、く、ん
 それ、の、元、監、也、あ、へ、れ、書、金、田、の、母、姓、と、あ、る、れ、夜、の、書、金、田、
 意、の、を、う、う、も、思、ひ、の、う、上、候、の、地、な、る、と、わ、や、

解、云、云、の、素、甘、藤、の、姓、名、ハ、葉、當、の、強、盜、ハ、與、冬、の、夜、盜、を、し、
 同、く、も、只、上、候、の、故、事、を、取、れ、る、の、を、し、別、ハ、な、れ、意、を、し、る、
 百、年、前、う、う、と、思、ひ、の、う、四、竹、ゆ、と、い、ふ、の、ハ、ひ、う、上、候、の、
 い、ま、の、郡、む、の、小、さ、な、金、か、ね、村、上、に、は、田、圃、を、開、く、あ、ん、
 む、と、相、撲、を、う、あ、う、あ、う、藤、源、太、親、の、お、う、の、大、お、ん、を、
 ま、う、う、う、み、入、れ、あ、げ、う、と、う、と、う、と、握、り、し、批、評、後、ハ、

多力なり。中々相撲の敵も有。且酒を嗜み博奕をぬき
ふ。其状を著せしめ。相撲の達帳より博徒より賭熊
頼元より巨僧まで。数人陳る酒をのみ。餅みさく。ひて
ふ。我々も屍骸へゆ。ある度。其子成長し。親の仇を報ひ
んと欲す。少くあり。あるへけれ。四ツ竹や。さうさ。さ
あるへ。まれ。この曲子より。と。世の婦幼は。知れ
る。天明中。初代の市川。之助。白藤源太。は。折々。狂を
已。これ。四ツ竹や。絶。う。四十年。あま。へ。他。都。の。者
富。男。れ。な。る。え。の。こ。ま。ゆ。校。白。藤。源。太。の。それ。
博。徒。る。も。盗。賊。る。も。素。藤。の。姓。名。小。負。る。昔。人。を

証する。例の理評のあら。これ。な。る。ま。ま。
白藤源太と。あ。つ。て。盗。賊。る。ぬ。昔。人。を。証。する。ま。
いつ。あ。は。上。保。の。事。実。を。取。る。の。い。る。れ。校。ま。の。此。
此。其。の。要。令。な。る。石。魂。録。の。初。編。は。裁。合。牛。洲。九。郎。清
繩。の。姓。名。の。昔。原。傳。授。も。智。温。の。車。の。の。時。平。の。大。臣。
梅。王。梅。九。を。罵。り。初。は。牛。が。ら。う。青。蠅。め。ら。い。る。を。取。り。ん。
この。ま。い。文。記。中。姫。路。侯。の。小。臣。如。藤。源。太。藏。梧。琴。々。や。悟。り。
予。は。生。き。且。笑。ひ。且。感。心。の。う。と。い。ひ。た。彼。牛。洲。の。石。魂。録。當
篇。の。建。物。有。り。切。は。る。る。を。取。り。せ。り。の。姓。名。を。ま。た。い。
相。や。う。と。を。の。り。理。評。あ。は。れ。る。九。郎。清。繩。の。傳。授。め。

人の姓名、机のうしろ、俄頃、思ひ起し、禁裏、觸れさ
るるも、もまう、ふれ、一人毎、法、ある、も、あ、白、あ、
え、本、上、居、る、彼、源、左、相、撲、の、鯨、号、る、と、あ、白、を、素
二、易、と、モ、と、預、也、又、源、太、の、中、間、は、金、字、と、う、た、七、源、金、太
と、れ、ハ、金、置、材、の、鯨、号、と、名、と、鯨、号、を、お、創、志、ぬ、ハ、竹、号、
思、方、の、汚、行、ある、を、淨、と、い、と、同、日、の、談、と、い、と、い、

第百二回の評末、と、柴、鶴、鶴、の、す、う、う、一、名、る、と、い、ま、此
同、い、う、う、漢、名、これ、當、う、本、草、家、求、ん、た、お、公、卿、
向、ハ、早、道、知、る、と、示、教、と、い、の、同、う、う、い、う、か、い、鳴
手、や、且、か、う、憚、り、あれ、と、創、の、思、辨、と、い、う、黙、と、い、う、あ、ぬ

あれ、ゆ、ハ、一、笑、と、い、秋、を、胡、校、又、天、生、た、る、と、
と、い、せ、た、れ、い、と、い、某、用、を、と、い、正、と、い、あ、ぬ、と、い、色、音、の、ち、の、ち、
と、い、う、れ、う、と、い、と、迷、憾、と、い、と、い、ハ、一、笑、

答、て、云、う、い、ま、と、漢、名、柴、鶴、鶴、と、い、ハ、飼、の、龍、と、い、
り、書、の、漢、名、の、修、と、い、と、い、又、瓊、浦、偶、筆、と、い、載、と、い、ハ、
近、と、い、長、崎、と、い、本、船、人、と、い、い、と、い、と、い、柴、鶴、鶴、と、い、
い、い、と、い、と、い、と、い、漢、名、と、い、と、い、と、い、思、ぬ、の、ち、
あ、の、名、ハ、唐、山、の、俗、稱、と、い、本、船、人、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、
ゆ、と、本、土、と、載、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、唐、山、と、い、と、い、
と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、
と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、

我のこころめかれいふいふ彼まゝあるまじり、まづ、
 字も実用字に當り、と假名をかき、續けりとて、
 物まゝぬゑるゝ、本行六七輯以下、唐山の俗語の
 抄用をぬぐ、この辨字九輯下巻の中の贅言は、
 江戸、近江、大阪のちやうどなまゐね、作中の博識ふ
 てふ故、是の樂聲、鈴子ゆり、んたをこゝと、
 師傳のあやまをまゝひきて、眠のつけぬちゝのるへ、

第百之回の餘評は、妙椿の椿字を陳思子と云ふやう
とらひてあまきことゝいふ狀をこのせむべし。斯くを鑑りぬる覺
えの用室といふやうに又あつたやうな椿菟の椿字は何と
せん常々よく此等の書もあるやうなものであつて、さういふ辰年といふ

何又予知者、陸示教孰いそそふ二

[illegible]

あやうれ

ふみ解の評評、まゝ拙答のまゝ評の既書、あやうれ、筆
の海、いふ無、いふ、失敬の言、いふ、あやうれ、
いふ、あやうれ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
既、三昧、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

著作、作、書

條、宗、利、人、近、上、玉、宗、前



